

領域略称名：顔・身体学

領域番号：1901

令和元年度科学研究費助成事業  
「新学術領域研究（研究領域提案型）」  
に係る中間評価報告書

「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築  
—多文化をつなぐ顔と身体表現」

（領域設定期間）

平成29年度～令和3年度

令和元年6月

領域代表者（中央大学・文学部・教授・山口 真美）

# 目 次

## 研究領域全体に係る事項

1. 研究領域の目的及び概要	4
2. 研究の進展状況	6
3. 審査結果の所見において指摘を受けた事項への対応状況	9
4. 主な研究成果（発明及び特許を含む）	11
5. 研究成果の公表の状況（主な論文等一覧、ホームページ、公開発表等）	14
6. 研究組織（公募研究を含む）と各研究項目の連携状況	19
7. 若手研究者の育成に関する取組状況	21
8. 研究費の使用状況（設備の有効活用、研究費の効果的使用を含む）	22
9. 総括班評価者による評価	23
10. 今後の研究領域の推進方策	25

**研究組織** (総：総括班、計：総括班以外の計画研究、公：公募研究)

研究項目	課題番号 研究課題名	研究期間	代表者氏名	所属機関 部局 職	構成員数
X00 総	17H06340 トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築—多文化をつなぐ顔と身体表現	平成 29 年度～ 平成 33 年度	山口 真美	中央大学・文学部・教授	3
A01 計	17H06341 顔と身体表現の文化フィールドワーク研究	平成 29 年度～ 平成 33 年度	床呂 郁哉	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授	5
A01 計	17H06342 顔と身体表現の多文化比較フィールド実験研究	平成 29 年度～ 平成 33 年度	高橋 康介	中京大学・心理学部・准教授	4
B01 計	17H06343 顔と身体表現の文化差の形成過程	平成 29 年度～ 平成 33 年度	山口 真美	中央大学・文学部・教授	1
B01 計	17H06344 顔と身体表現における顕在的・潜在的過程	平成 29 年度～ 平成 33 年度	渡邊 克巳	早稲田大学・理工学術院・教授	2
B01 計	17H06345 顔と身体表現における感覚間統合の文化間比較	平成 29 年度～ 平成 33 年度	田中 章浩	東京女子大学・現代教養学部・教授	2
C01 計	17H06346 顔と身体表現の比較現象学	平成 29 年度～ 平成 33 年度	河野 哲也	立教大学・文学部・教授	2
総括・計画研究 計 7 件					
A01 公	18H04191 顔色—表情知覚の相互作用の文化・世代間比較	平成 30 年度～ 平成 31 年度	南 哲人	豊橋技術科学大学・准教授	1
A01 公	18H04192 牧畜民社会における感情の身体表現とその変化：東アフリカ・マサイの事例から	平成 30 年度～ 平成 31 年度	田 暁潔	筑波大学・体育系・助教	1
A01 公	18H04199 身体化された情動の文化化を探る—中国雲南省少数民族の身体的心性—	平成 30 年度～ 平成 31 年度	山田 祐樹	九州大学・基幹教育院・准教授	1
A01 公	18H04200 美しい／かわいい／不気味：顔情報変異の布置を用いたヒト普遍性／文化間変異の検討	平成 30 年度～ 平成 31 年度	橋弥 和秀	九州大学・人・環研・准教授	1
A01 公	18H04202 顔・身体表現から検討するトランスカルチャー下の装飾美	平成 30 年度～ 平成 31 年度	山本 芳美	都留文科大学・文学部・教授	1
A01 公	18H04203 ミニマルな顔表現の文化的差異に関する研究	平成 30 年度～ 平成 31 年度	金谷 一朗	長崎県立大学・教授	1
B01 公	18H04180 Non-verbal communication through yawning	平成 30 年度～ 平成 31 年度	Tseng Chiahuei	東北大学・電気通信研究所・准教授	1

B01 公	18H04182 計算論的行動計測技術に基づく顔と身体表現における物理的対面の機能とその障害の解明	平成30年度～ 平成31年度	松田 壮一郎	筑波大学・シス情工・助教	1
B01 公	18H04183 顔の色と情動認識の異文化比較	平成30年度～ 平成31年度	溝上 陽子	千葉大学・工学系研・教授	1
B01 公	18H04185 社会的相互作用を支える無意識の対人間協調ダイナミクス	平成30年度～ 平成31年度	三浦 哲都	早稲田大学・人間科学学術院・准教授	1
B01 公	18H04186 社会的顔認知とその多様性の心理物理学的解析	平成30年度～ 平成31年度	本吉 勇	東京大学・総合文化研究科・准教授	1
B01 公	18H04193 顔に由来する社会的価値が顔の記憶に与える影響とその神経機構の解明	平成30年度～ 平成31年度	月浦 崇	京都大学・人・環研・教授	1
B01 公	18H04194 顔・身体認識理解への統合認知進化的アプローチ：「発達－文化－進化」の観点から	平成30年度～ 平成31年度	友永 雅己	京都大学・霊長類研究所・教授	1
B01 公	18H04195 複数人場面における個人特性と関係性の認知：表情手がかりの効果	平成30年度～ 平成31年度	上田 祥行	京都大学・講師	1
B01 公	18H04197 大脳皮質処理と皮質下処理が顔認知に与える影響：計算モデルと心理実験による検討	平成30年度～ 平成31年度	稲垣 未来男	大阪大学・生命機能研究科・助教	1
B01 公	18H04198 可視的変形の手術後における自己顔の再認知過程	平成30年度～ 平成31年度	社 浩太郎	大阪大学・歯学・招聘教員	1
B01 公	18H04201 個体関係認知の神経基盤とそのトランスカルチャー比較	平成30年度～ 平成31年度	岡本 正博	福島県立医科大学・医学部・助教	1
B01 公	18H04205 顔面表情認知にしぐさ・姿勢が及ぼす影響に関する実験的検討	平成30年度～ 平成31年度	渡邊 伸行	金沢工業大学・准教授	1
B01 公	18H04206 他者心理の手がかりとしての表情理解に関する哲学的・認知科学的研究	平成30年度～ 平成31年度	長滝 祥司	中京大学・教授	1
B01 公	18H04207 他者の視線が自己の行動に与える影響の文化差：二者同時記録fMRIを用いた検討	平成30年度～ 平成31年度	小池 耕彦	生理学研究所・助教	1
B01 公	18H04208 深層学習による顔・身体画像表現の異文化差の解明	平成30年度～ 平成31年度	林 隆介	産総研・主任研究員	1
C01 公	18H04187 日本、中世の絵巻物にみる人物表現の顔と身体の表情に関する研究	平成30年度～ 平成31年度	宮永 美知代	東京藝術大学・美術学部・助教	1
C01 公	18H04189 身振り概念の変化のメカニズムに関する美術史的考察－古代ギリシア・ローマ美術から	平成30年度～ 平成31年度	田中 咲子	新潟大学・人社教育・准教授	1
公募研究 計23件					

# 研究領域全体に係る事項

## 1. 研究領域の目的及び概要（2ページ以内）

研究領域の研究目的及び全体構想について、応募時に記述した内容を簡潔に記述してください。どのような点が「我が国の学術水準の向上・強化につながる研究領域」であるか、研究の学術的背景（応募研究領域の着想に至った経緯、応募時までの研究成果を発展させる場合にはその内容等）を中心に記述してください。

顔と身体表現は常に個人の由来を露出し、かつ顕著に表現し、あるいは個人が何者であるかを読み解くことができる、隠すことのできない媒体である。グローバル化が叫ばれる現在、これまで無意識に行ってきた顔と身体にかかわる営みを意識化し、それぞれに「当たり前」とされてきたことを再考する領域を立ちあげたい。すなわち、異質なものが共存していく社会の中での顔と身体表現が持つ可能性、顔と身体を使いこなすことにより異文化理解を促す可能性を、心理学・文化人類学・哲学の視点から、既存の研究分野の枠組を超えてともに検討していきたいと考える。

メールやLINE、Twitter等、インターネットの普及で、世界に向けて気軽に意見を発信できるようになったが、その媒体は言語としても、感情をダイレクトに表すのは「顔文字」であったりする。また、世界に向けて自分自身を示すプロフィール写真で使われるのも、「顔」である。インターネットの普及により、現代社会に生きる人類は、これまでにない大量の顔と身体表現にさらされる。顔や身体という媒体において、われわれの社会はかつてないほどに膨大に広がったともいえる。メディアの進化に付随して、顔の越境化は進む。世界各国の美男美女を見る機会に恵まれ、我々が見る顔の尺度は変わってきたのではないだろうか。インターネット以前、さらにはテレビ・新聞などのメディアが普及するまでは、覚えなくてはいけない顔の数は身内や親戚程度にとどまったことであろう。その間には、どのような違いがあり、どのような精神的・物理的な負荷があるのだろうか。

一方で依然としてアンタッチャブルとされてきた「異文化」は、意識の外に存在したままの状況である。たとえば、自分と違う肌の色、自分とは違う身振りや手ぶりに忌避感を感じることは、異質なものに対する忌避感、ヒトの自然な心の働きである。一方で、顔は個人がそれぞれの社会で適応していく上の道具でもあり、どう使いこなすかについては、生まれ育った家族や社会的背景により差異が生じていく。グローバル化された世界の中でも、こうしたヒトの持つ本性は隠されたままではないだろうか。なぜ、自分と肌の色が違う人々を、違う目で見てしまうのか。異なる身体表現を持つ人々、ヴェールをかぶった女性に対し、違和感を抱いてしまうのか。互いにとっての、こうした異質を捉え直す時期にあるのではないだろうか。「身体的に知ること」を封印してきたことに対し、意識化して理解すべき段階にあるのではないか。

本研究領域では顔と身体表現の無意識を意識化すること、自身の潜在的な感覚を明らかにすることを、現代社会が直面しつつある「トランスカルチャー状況下」への解決策の一つとして位置づけたい。トランスカルチャー状況とは、「文化」の壁を取り壊す力とそれを作る力が同時に働いているような状況のことである。それはアイデンティティの改変と維持、変身と固定が並行して生じるような状況である。日本ではまさに、移民や外国人労働者、海外からのインバウンド観光客などの受入が拡大する一方でヘイトスピーチが横行する等、東京オリンピック・パラリンピックや大阪万博などの、異なる文化や社会を受け入れる「壁」を目の前にしたアンビバレントな状況が存在する。「刺青」をした外国人客に銭湯などの施設がどう対応するのかといった問題はその端的な一例である。このように複数の地域文化や価値観が混在する状態からそれらが交じり合う社会へと転換していく中で、人はどのようにこれまで学習してきた地域性を重んじ、どのように壁を作り、しかしその中でどのように壁を越え新たな社会を構築していくのか、その苦しみや再び適応していくことについて、顔と身体という我々人が持つ原始的な媒体を対象に個人個人の認知や感覚の視点から解明を行いたい。顔と身体について考えることは、科学技術が進歩していく中で生じる、身体性の変容や身体加工までも考察の範囲におさめるものである。

顔や身体は目前に物理的に存在する対象であるため、多様な分野の共通の研究対象となる。現実の顔や身体表現とその認識様式を実験的に分析すること、多様性とその背景となる要因を調査すること。そこから個と社会のメカニズムの解明と再考が可能となると考える。また、過去の文学作品や絵画に描かれた顔や身体表現を解析し、そこから時代背景を解析し直すことも可能となる。すなわち、心理学、文化人類学、社会学、脳科学的な手法の適用が可能であり、美学、化粧学、文学、歴史学などの観点から、顔と身体表現から時代や社会を考察することも可能である。さらに現代社会が持つ隠された病理や可能性についても再考しうる。このように様々な領域の様々な観点から顔や身体は研究対象となり、それぞれの知見を交流させることにより、「既存の学問分野の枠に収まらない新興・融合領域の創成を目指すもの」として、顔という統一的な対象を用いて再考することができる。誰もが他者の視線にさらされ続け必ず持っている「顔」と「身体」という対象を用いて、人文・社会科学分野を再構築したい。さらには我々日本人ならびに世界が目の前に築いている「壁」について、「トランスカルチャー」という概念から、壁を壊しつつ壁を作り上げてしまう人類の特性について個のあり方に焦点を当ててとらえていきたい。

これまでの心理学・認知科学の研究から、普段意識することのない視線の動きの解析から、さまざまな差異が解明されつつある。さらに近年の文化心理学研究では、顔を見ることの違いを新たに探る手法を呈示した。アイトラッカーを使い顔のどこを見ているかを解析し、これまで信じられてきた表情認識の通文化性の神話が崩壊しつつある。1980年代に心理学者P. Ekmanにより示された喜怒哀楽といった基本表情カテゴリに、欧米文化圏と東アジアの間に違いがあることが注目されている。こうした単純な違いを認める研究は多いが、より詳細にそれぞれの地域環境背景を調べるべき段階にあると考える。さらに発達科学の研究から、こうした自身の生まれた地域

環境への適応は生後一歳に満たずして成立することも知られている。顔の適応は母国語の獲得と同様の時期に、これまで見てきた顔と声によって成立することが示されている。すなわち顔への経験の少ない生後半以下の子は、人種を超えてサル顔までも区別でき、この時期はあらゆる言語を聞き取ることもできる。それが環境適応に従い、耳にすることのない外国語の聞き取り能力も、目にすることのない異なる言語を話す顔を区別する能力も、失っていくのである。こうした適応過程の研究成果を踏まえることにより、またさらに詳細な研究を展開することにより、トランスカルチャー状況下の中で我々人はどのように適応していくかの指針を考えることができるであろう。

顔とは個々人がこの社会で適応していく上で可変性を求められる道具であり、どう使いこなすかが人それぞれ異なる。特に男女の違いは大きく、顔の表現こそが限りない可能性を持つことは、化粧の研究からも示される。化粧による容顔の変化は整形をしのぎ、心理的変容へのその効力は計り知れない。こうした変化により私たちの実存はどう変わるのか、ヴァーチャルリアリティが現実味を帯びつつある現在、私たち自身それぞれが持っている顔身体をいかに超えていくのかについて考察することは重要な段階にある。それは男女という境界の設定を超えたトランスジェンダーの考察にもあてはまる。

国内外でグローバル化が強く叫ばれる中で、個々の違いの理解に基づいた真のグローバル化の視座を人文科学から発信する。昨今、宗教的・信条的な対立は世界各地で勃発し、その融和はなかなか難しいように見える。背景となる概念や文化的な違いから、さまざまなすれ違いを産み出す可能性があり、時に生じるインターネット上でのトラブルなどからも、言葉だけのコミュニケーションだけでなく、よりプリミティブであるが故に文化を超えたコミュニケーションの可能性を持ち、それぞれの文化固有の可能性を秘めた顔と身体表現の再考の必要性が感じられる。ふだん意識することのない、顔と身体表現を意識化し再考察することにより、異質な他者を理解する視座を提供する。

このプリミティブな身体表現の意識化されていない点を意識化することにより、それぞれの地域社会の中で閉じられたコミュニケーションを理解し、他者や異質性の受容を導きたい。顔と身体表現に関する共通性と異質性を、個人内・外・間という3つのレベルで多層的にあぶり出すことで、東アジアに位置する日本の人文社会科学から新たな研究領域を構築する。

顔や身体表現の個性、あるいは地域や社会の固有性について、意識化されない部分をあぶりだして意識化することにより、それぞれの違いを正しく認識することができる。顔や身体表現の違いとそれを見ることの違いを読み解き、理解し、そこから他者や異質なものの心、時代や社会について再考する機会を作り出したい。

新たな視点からの顔認知の学習プロセスの解明については、近年の顔認知モデルにおいて、短時間に集中して顔を見る順応による顔認知の変容が検討されている。本領域では、こうした顕在的な学習とともに潜在的な学習を視座に入れた検討を行う。すなわち顔を社会的コミュニケーションに利用する際には、社会的な存在である顔を情動とともに「親しい個人」として処理することが根底として必要だが、その際には顕在的な認知処理とともに情動システムを含む潜在的な処理過程に関わる可能性があり、このように「意識にのぼる顔」と「意識にのぼらない顔」を軸として、顔認知の新しいモデルを提案する。またフィールドワークを含む文化人類学の手法を併用することで、異なる地域の実際の生活の現場における顔や身体表現をめぐる差異とその意味についても比較検討が可能となり、これまでの先行研究では看過されがちであった実際の生活の現場の文脈における顔や顔と結びついた身体表現についても、より詳細で正確な研究が可能となる。そこでは狭義の顔はもちろん、顔を含む各種の身体的表現、衣服、装飾、仮面、ヴェール、スカーフなど顔と身体表現に深く関わる項目に関してフィールドワークの手法を通じて各地域や文化ごとの差異と共通性などが解明されることが期待される。

本申請では心理学、文化人類学などの実証的なアプローチに加え、顔と装いに関する哲学的な視点も取り入れることで、アカデミックな領域のみのインパクトを越えて、広く社会全体にトランスカルチャーの意義と視点を広げていくことができると考える。哲学は言葉と概念を駆使し、個々の事実とその解釈を1つの表象へとまとめ上げていく作業でもある。顔をめぐると他者理解／異質性の理解の問題を広く社会に啓蒙していく手段を模索する。また、哲学をベースに化粧や装いについても広く考察しながら、ヴェール、スカーフや仮面などがもつ社会的意味を考察し、女性ならではの視点から広く啓蒙していくことが可能となる。本申請では心理学と文化人類学・哲学を基礎として、人文社会科学の様々な領域の枠組みを融合することにより、共通の視座と手法を用いてこれまで捉えきれなかった顔と身体表現を分析的に捉え直すことにより、新たな視座から「顔と身体表現」によるトランスカルチャーの理解を模索していく。

## 2. 研究の進展状況〔設定目的に照らし、研究項目又は計画研究ごとに整理する〕（3ページ以内）

研究期間内に何をどこまで明らかにしようとし、現在までにどこまで研究が進展しているのか記述してください。また、応募時に研究領域として設定した研究の対象に照らして、どのように発展したかについて研究項目又は計画研究ごとに記述してください。

### 研究項目 A01 顔と身体表現の異文化性検討

#### A01-P01「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究」（代表：床呂 郁哉）

本研究班は、人類学的フィールドワークを含むフィールドサイエンスの研究手法を駆使し、顔と身体表現について、現場の文脈に即した調査研究を行う。顔や関係する身体表現に関して、イスラーム圏を含む東南アジア域内における異なる文化・社会的文脈に応じた比較研究を遂行することを目的としている。平成29年度、30年度では、顔を含む各種の身体的表現、衣服、装飾、仮面、ヴェール、スカーフなど顔と身体表現に関わる項目に関し、東南アジア各地の文化ごとの差異と共通性を析出するための基礎的な実地調査に基づく研究を実施した。具体的には、床呂郁哉は東南アジア島嶼部における顔と装飾文化の関わりや顔の表出に関してキリスト教徒とムスリムの両文化圏での比較調査を実施した。吉田ゆか子は、インドネシアのバリ島を中心とする仮面芸能についての現地調査から、バリの身体表現における顔の役割やその文化的文脈に関して研究を実施した。塩谷ももは、インドネシアのジャワ島など東南アジアのイスラーム圏における女性イスラーム教徒のヴェールやスカーフ等の着用をめぐる顔や身体の出出と隠蔽に関しフィールドワーク研究を行った。

また上記のような班員による個別の調査研究に加え、班全体での成果共有と本領域の他班との連携も兼ねて国内でのシンポジウムと領域会議を実施したほか、平成30年3月にバリ島にて、インドネシア人研究者も交えた国際ワークショップを実施した。更に平成30年11月にAA研で実施したシンポジウムでは領域全体のテーマでもあるトランスカルチャー状況をめぐって特別セッションが生まれ、研究成果に基づき集中的な討議が行われた。

#### A01-P02「顔と身体表現の多文化比較フィールド実験研究」（代表：高橋 康介）

フィールド実験を通じた多文化の感情認識と感情表出について、表情判断のタブレット実験、表情表出の描画実験を複数のフィールドで実施し、順調に進展している。平成29年度のフィールド実験として、タンザニア（島田・高橋）・カメルーン（大石）・タイ（銭）・フィンランド（銭）で単純顔の表情描画実験を実施した。平成30年度のフィールド実験として、タンザニア・カメルーン・中国雲南（銭）・ケニア（岡本・田）で表情判断実験および人物模写描画実験を実施した。日本国内にて、これらの実験結果との比較のためのコントロール実験を実施した。これらのフィールド実験の結果から、顔の抽象化や顔認識の枠組み、つまり身体の中の「顔」の位置づけ、形態、役割において、多様性が認められている。例を示せば、フィールド実験中の対話において、◎に対して「顔」として認識がなされないという観察が複数回なされている。フィールドの一つ、マサイでは「顔 face」にうまく対応する単語が見当たらない。我々が当たり前のように顔として認識しているものが、他の地域や文化の人たちにとってはそうではないかもしれない。トランスカルチャー状況における「顔」とは何かという問題、そして顔と身体の関係性についてもう一度考え直すことが必要であろうという結論に至っている。

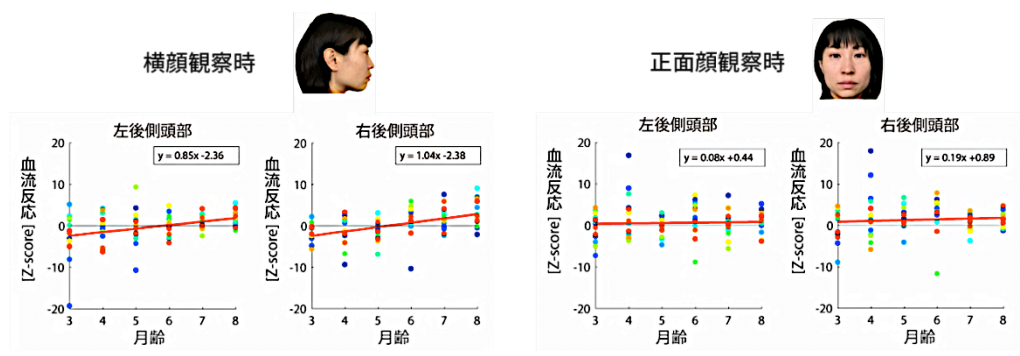
本計画班の目的の1つである人類学と心理学の越境的学際融合についても、当初の計画以上に進捗しており、特にフィールド実験の実践を通して、人類学と心理学の相乗効果が得られつつある。人類心理会議をこれまでに6度開催し、フィールド実験の進め方や得られたデータの解釈、人類学と実験心理学の越境的学際融合の進め方についてなど密に議論を行っている。計画班 A01-P01 床呂氏や公募班 A01-K102 田氏なども参加し、領域全体に渡る人類学＝実験心理学の研究連携のハブとして機能している。平成30年度文化人類学会分科会「文化人類学と異分野のコラボレーション—達成したこと・問題点・今後の課題」にてフィールド実験研究の取り組みや課題、学際融合の実情を紹介し議論を進めた。A01-P01 床呂班、B01-P01 山口班からコメンテーターが参加した。また、計画班 C01-P01 河野班と合同で第3回顔身体カフェ「顔を描く・顔を描かれる・顔を知る」を開催した。顔を「描く」ことによる内面の表出についての調査を行い、実験計画（自画像描画）の立案につながっている。以上のように、顔の認識と描画についての研究を進める中で、人類学、心理学、哲学の相乗効果が得られつつある。

### 研究項目 B01 顔と身体表現の異文化を作り上げるメカニズムの解明

#### B01-P01「顔と身体表現の文化差の形成過程」（代表：山口 真美）

これまでの研究期間で顔に関する一般書を公刊し（山口真美（2018）「損する顔 得する顔」朝日新聞出版）、美容や小児関連研究団体、中国の小児科学会、保育の現場や盲学校での研修などで講演し知見を広めた。

乳児の学習過程について特筆すべき結果としては、顔処理について縦断的な脳計測のデータを示すことができたことである。①生後3~8か月までの顔処理に関わる側頭部位の脳活動の縦断計測を、近赤外分光法 (fNIRS) を用いて行い、正面顔認知と横顔



認知で発達過程が異なり、その発達には個人差があること、生後8か月に向けて個人差が小さくなることを明らかにすることができた。この成果は、顔認知の個人差をその発達初期から明らかにする点において重要な成果であり、個人差の発達とその起源を探る本領域にとって重要な研究である。日本経済新聞(平成30年12月5日)等に成果が紹介された。(論文7. A longitudinal study of infant view-invariant face processing during the first 3-8 months of life. *Neuroimage*) ②また、顔の印象形成の発達の变化を検討する論文を発表した。これまで欧米文化圏の乳児で明らかにされていた印象形成が、日本人乳児でも同様にみられることを確認するため、生後6~8か月の日本人乳児を対象として、顔から得られる第一印象の重要な2大因子である「信頼感」と「支配性」の獲得過程について検討した結果、支配性が高い顔同士のペアでは信頼感の高い顔をより長く注視するという結果が得られ、成人と似た顔の印象評価が生後6~8か月で既に獲得されている可能性を発表した。この成果もプレスリリースを行い、毎日新聞(平成30年9月7日)に紹介されている。(論文9. Infants prefer a trustworthy person: An early sign of social cognition in infants. *PLoS ONE*) ③さらにイタリアとの共同研究では、近赤外分光法 (fNIRS) を用いて、本申請の核となる「知覚的狭小化」、すなわち育てられた環境への適応過程の脳内機構を調べる実験成果を発表した。(論文12. Perceptual narrowing towards adult faces is a cross-cultural phenomenon in infancy: A behavioral and near-infrared spectroscopy study with Japanese infants. *Developmental Science*) 現在は顕在的な顔学習過程を明らかにしており、引き続きカナダ・アメリカ・フランス・イタリア・スイスとの共同研究を行い、さらに皮膚電位反応や瞳孔反応などの新たな装置を導入し潜在処理過程の研究を海外と共同で進めている。

#### B01-P02「顔と身体表現における潜在的・顕在的過程」(代表: 渡邊 克巳)

約1年半に及ぶ現在までの研究により、一部は既に論文として公刊された他、今後の研究の基礎となる1) 国際共同顔・表情データベースの構築、2) 主観印象を操作できる顔構造統計モデルの構築、3) 顔認知能力の個人差の推定法、4) 社会適応に関わる顔身体認知の社会・文化による影響などについて着実に研究を進めている。

顔・身体における認知・行動を扱う本計画においては、人の顔・身体に関して国際的かつ共同で利用可能データベース構築が必須となる。そのため1) 国際共同顔・表情データベースの構築をスイス・フリブール大学と共同で進めている。日本とスイスとで同一セットアップ(暗室、撮影機材等)にて欧州人・アジア人の顔画像・映像撮影を進めており、既にこのデータベースの一部を使った研究について学会発表を行っている。なるべく早期に公開できるよう、調整・検討を進めている。

顔認知の顕在的過程を扱うにあたり、他者の顔観察時に感じる主観印象は無視できないものである。顔が与える主観印象には様々なものがあるが、それらを全て網羅的に調べるための顔データベースを構築するには、少なくとも数百から数千人に及ぶ写真撮影を行う必要があり、その経済的・時間的コストを考えると現実的に困難である。そこで我々は人の顔画像を画像処理によってその形態特徴と表面特徴に分解し、主観印象を定量的に操作可能な顔構造統計モデルの構築を進めている。本手法により魅力や脅威などの主観印象とほぼ対応する顔画像を生成可能であることを示しつつある。

また、顔認知の潜在的過程を扱うにあたり、顔認知の個人差は必ず考慮せねばならない。同一の顔であってもそれをどのように認知するかには大きな個人差がある。顔認知の個人差を簡単に予測できれば、1つの課題に要する実験・測定時間の短縮によって、全体としての実験時間を同一にしつつ、より多くの課題を行わせることができ、人の多面性を評価できるようになる。人工知能・機械学習を用い質問紙による回答から顔認知成績を予測可能なモデルを構築しており、現在までのところ従来型の手法と比べて機械学習がより高精度に人の顔認知の個人差を捉えられることが示されている。今後、さらにモデル予測能の向上を図るとともに、国際比較を進める。

そして、社会適応に関わる顔身体認知の社会・文化による影響については、既にオーストラリアにおいて顔と身体との相互作用に関するデータ取得を行い論文として公刊した。例えばスポーツや舞踊において身体と視線方向を意図的にずらして、それを観察する他者を欺くあるいは違和感を生じさせるといった行為・表現があるが、本研究はその心理物理学的モデル化を行った最初のものである。本モデルが日本ではどうなるか、あるいは一つの国内だけでも典型群とは異なる特性・傾向・志向を持つ個人においてどのように異なるか、そしてトランスカルチャー状況下においていかに変容するかを調べることで、相互作用という観点から顔・身体統合的認知を捉え



ることができるだろう。そして、アメリカにおいてはミシガン大学の北山忍教授との共同で表情認知に関する脳波研究を準備中である。本研究では日米で同じセットアップを用意し、共同顔身体データベースを利用した画像・映像刺激によって国際共同研究を進める。

#### B01-P03「顔と身体表現における感覚間統合の文化間比較」(代表：田中 章浩)

多様な文化的背景をもつ人々のグローバルな交流がますます加速する現代社会において、円滑なコミュニケーションを実現するためには、自身の感情の表出、そして他者の感情の知覚を媒介する顔と身体表現の普遍性と文化特異性を知ることが不可欠である。感情の知覚には顔や身体表現(視覚情報)のみならず、声(聴覚情報)も利用され、感覚間統合が本質的な役割を果たしている。申請者らのこれまでの研究の結果、他者の感情を知覚するとき、欧米人は顔への依存性が高いのに対し、日本人は声への依存性が高いことがわかっている。本計画班では顔・身体・声の認識様式の文化的多様性の根源として、感覚間統合に着目する。そして、幼児期から成人にかけて感情知覚における複数情報統合の様式がどのように変化するかを比較文化的に検討し、これらの知見を統一的に説明する理論的枠組みの提唱をめざす。

言語・非言語コミュニケーションの基盤となりうる感覚間統合の視点から「顔身体学」の学術領域に寄与するため、言葉の通じない同士の日蘭の国際共同研究から出発し、顔・身体・声からの感情知覚の文化差とその形成過程について検討する。これまでに、(1) 850名を対象とした大規模な顔と声からの感情知覚実験の結果、オランダ人では顔を優先させて読み取る「顔優位」であるのに対し、日本人では顔優位から児童期を通して徐々に声優位にシフトすることがわかった。一方で、視聴覚感情知覚の発達は生涯を通して単調な変化ではなく、逆V字型に変化することが明らかになった。さらに、日本人の声優位性はどのように獲得され、誘発されるのかを明らかにし、トランスカルチャー状況における「異質な他者」とは何かを考察するうえで重要な知見が得られた。(2) 感情の知覚を起点として生じる一連の心理・行動をシステムとして捉え、視聴覚感情知覚とその後の社会的行動の関係性について、感情知覚が社会的行動を変容する過程を検討する実験を実施している。(3) トランスカルチャー状況下において重要な課題である成人移民における異文化再適応過程について、「文化獲得」の臨界期とその神経基盤を探るためにfMRI実験を実施しており、これまでに24名の脳活動を測定した。

#### 研究項目 C01 顔と身体表現の比較現象学

##### C01-P01「顔と身体表現の比較現象学」(代表：河野 哲也)

本研究(C01-P01)では、哲学的な観点から顔身体学の理論的な基礎づくりと、実証的な各研究の位置づけについて考察するとともに、フッサールに始まる現象学の方法を応用刷新しながら、異なる社会文化的制度における身体性の変異と変容に注目する「比較現象学」の確立を試みる。初年度は、「顔身体の比較現象学」国際研究会を立ち上げるための一環として、平成29年8月に第17回国際理論心理学会(立教大学)で国際的にアピールをした。平成30年3月にフランスの身体運動の哲学者Bernard Andrieu教授とその研究グループを招へいし、「間とあいの比較現象学」シンポジウム、連続講演会を行なった。また、映像を取り込んだ形での顔を含む身体動作の分析を行うために、iPad上で簡単に映像の編集ならびにコメントができる「顔身体アプリ」を製作した。2年目は領域全体と連携しつつ、以下の三つの研究を中心に行った。1) 顔身体学の理論化として『顔身体学ハンドブック』として刊行することを決定した(東京大学出版会より2021年3月刊行予定)。2) 身体の比較現象学を構築するために、身体の可視性と切り離せない人種へのまなざしについての研究を進めた。平成30年8月に、Alia Al-Saji准教授とHelen Ngo講師を招へいし、世界哲学大会(北京)で、さらに立教大学でも連続ワークショップを開催した。平成30年11月にはShaun Gallagher教授(University of Memphis)を中心とするグループとともに、国際シンポジウム「匿名の視線と自己の成立」、日本現象学会とも共同で身体技能に関するシンポジウムを行った。3) 「トランスカルチャー状況下」とはいかなるものかを明確にするために、平成31年3月に国際シンポジウム「トランスカルチャーとは何か?心理学と哲学の協働」を開催し、Eric Chelstrom准教授、Tamsin Kimoto講師を招へいし、トランスジェンダーの顔身体表現を分析した。平成31年3月下旬には、「インゴルドと『あいだ』」というシンポジウムを開催した。さらには領域全体のアウトリーチ活動として、これまでの2年間で市民と研究者がフラットな関係で議論できる場である「顔身体カフェ」を4回開催した(代官山、金沢、代々木、福島)。

### 3. 審査結果の所見において指摘を受けた事項への対応状況（2ページ以内）

審査結果の所見において指摘を受けた事項があった場合には、当該コメント及びそれへの対応策等を記述してください。

【所見】研究計画書全体を通して文化に関する概念についての統一的検討が不足していることに加え、本研究領域における複合的な知見をいかに統合するのか、といった課題もあり、領域内での有機的なつながりを一層促進するための工夫や、計画研究組織間の連携強化が望まれる。

#### <具体的な対応>

・総括班会議において、分野を超えた統一的観点をどのように確立するかについての議論を進め、領域会議の場で各分野を超えた議論を行いつつ、本領域が提案している「トランスカルチャー」の概念についての統一的検討を深めるため、以下のシンポジウムで議論を行った。これらのシンポジウムは審査結果の所見における、本領域全体を通じた文化概念についての統一的検討の不足という指摘に答えるものでもある。

すなわちまず、シンポジウム1において科学技術の進歩により現実の身体を超えた視座をすすめることから始め、シンポジウム2では地域社会あるいは歴史的観点からトランスカルチャーの意味について検討し、「トランスカルチャー」という現象が、境界確定と越境、分離と融合、アイデンティティの安定化と再構築という矛盾した二方向の力のせめぎあいからできていることが理解された。さらに集大成として2日間に渡りシンポジウム3を行い、初日は、顔へのプロジェクションマッピング技術を柱として、自分が所有しているはずの顔や身体が変容することへの身体性への問いかけを行った。2日目は哲学班が主体となり、男女や人種という境界がミックスされたり超えられたりする現代において、境界を超える先にさらに展開される境界について議論が進められた。男女という縛られた区分の越境と、その際に生じる痛みについても、当事者を含めた個のレベルから社会を考えるという点で本領域の原点があることを確認した。今後はシンポジウム3の討論の結果、刷新された文化概念を基礎として、本領域における様々な知見を統合し、領域内での有機的なつながりを強化しつつ領域外にも発信していくことが見込まれる。

【シンポジウム1】「ヴァーチャル世界でワタシはどうなる？」（日本科学未来館、平成30年7月29日）

ヴァーチャルユーチューバーの出現などヴァーチャル世界が現実味を帯びている中で、身体性はどうなるのか、私という身体性の越境について心理班と哲学班で議論を行った。ツイッターで40万以上の「いいね」を得る、非常に大きな反響を得たイベントとなった。

【シンポジウム2】「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、平成30年11月25日）

人類学班が主となり、トランスカルチャー状況とハイブリッド化に関する考察を広げ、エプシュタインらのトランスカルチャーの概念をもとにトランスカルチャー状況という場の重要性、越境することの危険と意義について議論を深めていった。本シンポジウムの報告書はすでに作成されている。

【シンポジウム3】「トランスカルチャーとは何か？心理学と哲学の協働」（牛込笹塚区民ホール、ワテラスコモンホール、平成31年3月2日、3日）

初日にプロジェクションマッピングの実演を含めた2日間に渡るシンポジウムを行った。2日目には、登壇者・参加者に多くの当事者が見受けられ、質疑応答も鋭いものがあり、活発な議論が行われた。

【留意事項1】総括班の位置づけが曖昧であり、その活動が消極的な印象があるため、複合的領域の創造に必要な「研究上の役割」（理論的枠組みの設定、そのための研究活動、多くの領域を含むプロジェクトの研究成果をまとめていく上での方法など）を強化することが必要である。

#### <具体的な対応>

・総括班会議を重ね、各分野を超えたイベントや国際シンポジウムを企画し、全体的な方向性を強化していった。イベントを立てて議論することは、各分野の若手研究者を集めることにつながり、複合領域としての融合を若手研究者も巻き込んだ形で進めることに専心してきた。

第17回国際理論心理学会シンポジウム（H29.8.24）、バリ島ワークショップ（H30.3.1-5）、公開シンポジウムとB.アンドリュース講演会「間とあいだの比較現象学」（H30.3.13-14）、国際シンポジウム「人と人の中にあること：協調と競合の対人間ダイナミクス」（H30.8.22）、ショーン・ギャラガー招聘シンポジウム「匿名の視線と自己の成立」（H30.11.12）、国際シンポジウム「トランスカルチャーとは何か？心理学と哲学の協働」（H31.3.2-3）、国際シンポジウム「イレズミ・タトゥーと多文化共生 「温泉タトゥー問題」への取り組みを知る」（H31.3.30）

・若手に焦点をあてた若手研究会を組織することにより、次世代の育成をベースにした複合領域の創設につとめてきた。心理学班若手主催で合計3回の若手公開研究会を行い、電子情報通信学会ヒューマン情報処理（HIP）研究会（H30.8.2-3）にて、公募班の若手研究者を招いた顔身体学研究会を企画し、若手研究者中心に公募班の非心理学領域に心理学的手法の導入を検討する試みを行った。

・アウトリーチとして、哲学カフェ方式の「顔身体カフェ」で各分野の研究者が一般向けの議論に歩み寄ることにより、領域の融合を試みた。東京、金沢、福島と多様な地域で、文化人類学・心理学・哲学がそれぞれメインの話をする4回のカフェを開催した。

・さらに顔身体学の理論化として『顔身体学ハンドブック』を刊行する（東京大学出版会より2021年3月刊行予定）。総括班が編集者と呼びかけ人となり、公募班とともに、これまでの研究成果や動向を踏まえながら、解説並びに整理について中心的な役割を担う。最重要項目などは総括班メンバーの連携により執筆される。

・総括班メンバーが中心となり、以下哲学・心理学・文化人類学の各関連学会の大会（国内外）において顔身体学関連シンポジウムを行った。

国際理論心理学会（H29.8、立教大学）におけるシンポジウム（人類学班、哲学班、心理学班合同）

日本文化人類学会研究集会（H30.6、弘前大学）分科会（文化人類学班・心理学班合同）

日本視覚学会冬季大会（H30.1、工学院大学）顔身体学シンポジウム（文化人類学班と心理学班合同）

日本顔学会（H30.9、明治大学）顔身体学シンポジウム（哲学班と心理学班・文化人類学班の公募班合同）

日本発達心理学会大会（H31.3、早稲田大学）ラウンドテーブル（人類学班と心理学班の公募班合同）

**【留意事項2】**例えば「トランスカルチャー」「異なる文化間」「異文化性」「文化差」とは何を意味するのか、あるいは、定義もないままに文化的な単位として「東アジア」といった用語を用いるなど、文化に関する用語の定義や使い方の統一がなされていないという指摘が複数あったため、本研究領域の根幹に関わる概念については、総括班を中心に整理が必要である。

<具体的な対応>

・本領域が提案している「トランスカルチャー」の概念についての統一的検討を深めるため、所見への対応で示したように、日本科学未来館の「ヴァーチャル世界でワタシはどうなる？」や顔へのプロジェクションマッピングなど、技術革新により自分が所有しているはずの顔や身体が変容することへの身体性への問いかけから、哲学班とともに身体性の越境について議論を深めてきた。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」、「トランスカルチャーとは何か？」などのイベントを重ねながら、概念の統一をはかってきた。そこで科学技術による身体変容、特にヴァーチャル世界での身体性の越境、人類学班が主体のトランスカルチャー状況とハイブリッド化に関する考察と、トランスカルチャー状況という場の重要性、越境することの危険と意義について議論を重ねてきた。「トランスカルチャー」という現象が、境界確定と越境、分離と融合、アイデンティティの安定化と再構築という矛盾した二方向の力のせめぎあいからできていることが理解され、今後はこの刷新された文化概念を基礎として、本領域における様々な知見を統合し、領域内での有機的なつながりを確保することが見込まれる。

・「トランスカルチャー」の社会文化的背景の考察を強化するため、総括班に新たに佐藤知久京都市立芸術大学教授に参画していただき、議論を進めた。

・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所のシンポジウムの報告書はすでに作成され、また顔学会誌において「トランスカルチャーの概念について」の考察を河野班が提示している。

・「トランスカルチャー」という現象が、境界確定と越境、分離と融合、アイデンティティの安定化と再構築という矛盾した二方向の力のせめぎあいからできていることが理解され、思想や技術などの内容がさまざまに流出し、相互に影響を及ぼし合う「流動」と、それを境界づける「線引」の2つのベクトルをもった力が行き交う場のことであることが理解された。それでのアクターが何になるか、いかなる境界画定と越境が行われるかは、記述に相対的であり、個別的・事例的であることは重要で、たとえば「トランスジェンダー」という分類は、男女の二分法の力学とそれを相対化する力の間に生まれた「緩衝地帯的」で、ある意味で宙吊りの概念であることなどが議論され、今後の研究の展開が見られる状況である。

**【留意事項3】**研究計画「A01-P01」と「A01-P02」については例えば、研究対象領域と被観察者を両組織間で重ねることによってより深いデータの比較検討が可能となることから、両計画研究間の連携の強化が必要である。

<具体的な対応>

A01-P02 高橋班のフィールド実験研究については、計画班 A01-P01 床呂班に加え、公募班（田班（ケニア）、山田班（中国雲南））とも連携を進めている。具体的には平成30年3月に床呂班主催のバリ島ワークショップにおいて高橋班のフィールド実験チュートリアルを実施し、実際にバリ島で床呂班メンバーがパイロットデータの取得にあたった。タブレットに映し出した顔の絵の画像をバリ人の被験者に示してその感情などを推測してもらった実験と、逆にバリ人の被験者に笑顔と泣き顔（悲しい表情）を描像してもらおうという実験の二種類を実施した。同様の実験を東南アジアのフィールドでも展開することを検討しており、既にフィリピンでは描画実験を実施した。

この際の経験を踏まえ、平成30年6月に高橋班が中心となって企画した文化人類学会分科会にて床呂氏をコメンテーターとして招聘し、フィールド実験の可能性を議論した。平成30年11月には高橋班で定期的に開催している人類心理会議にも参加してもらい、平成31年度以降の高橋班フィールド実験課題をフィリピンを含む東南アジア各地の床呂班の担当フィールドで実施するための準備に着手している。逆に高橋班ではアフリカを中心に仮面文化のデータ収集に着手しており、床呂班の東南アジア地域での仮面研究との連携を進めていく。

なお蛇足かもしれないが、フィールドワークを中心とする研究ではフィールドの共有のような形式的かつ表面上の連携は簡単に破綻する。異分野融合の歴史を見れば、このことは間違いない。A01-P01とA01-P02、及びフィールドワーク研究を行う公募班の連携においては、この点をよく認識した上でお互いのフィールドの状況や背景についての相互理解を第一に進め、その上で実際の研究連携へと発展させていく。

#### 4. 主な研究成果（発明及び特許を含む）〔研究項目ごとに計画研究・公募研究の順に整理する〕 （3 ページ以内）

本研究課題（公募研究を含む）により得られた研究成果（発明及び特許を含む）について、新しいものから順に発表年次をさかのぼり、図表などを用いて研究項目ごとに計画研究・公募研究の順に整理し、具体的に記述してください。なお、領域内の共同研究等による研究成果についてはその旨を記述してください。記述に当たっては、本研究課題により得られたものに厳に限定することとします。

##### 研究項目 A01 顔と身体表現の異文化性検討

##### A01-P01「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究」（代表：床呂 郁哉）

本研究班は、人類学的フィールドワークを含むフィールドサイエンスの研究手法を駆使し、顔と身体表現について、現場の文脈に即した調査研究を行う。顔や関係する身体表現に関して、イスラーム圏を含む東南アジア域内における異なる文化・社会的文脈に応じた比較研究を遂行した。平成 29 年度、30 年度では、顔を含む各種の身体的表現、衣服、装飾、仮面、ヴェール、スカーフなど顔と身体表現に関わる項目に関し、東南アジア各地の文化ごとの差異と共通性を析出するための基礎的な実地調査に基づき研究を実施した。更に各メンバーによる個別の調査研究に加え、班全体での成果共有と本領域の他班との連携も兼ねて国内でのシンポジウムと領域会議を実施したほか、海外でもインドネシア人研究者も交えた国際ワークショップを平成 30 年 3 月にバリ島にて実施した（図 1）。特に平成 30 年に AA 研で実施したシンポジウムでは領域全体のテーマでもあるトランスカルチャー状況をめぐって特別セッションが生まれ、研究成果に基づき集中的な討議が行われた（図 2）。これらの研究成果は床呂郁哉（編）(2019)『トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築（第 3 回）シンポジウム報告書』及び、床呂郁哉・吉田ゆか子・吉田優貴（編）(2019)『トランスカルチャー状況下における顔・身体（平成 30 年 3 月バリ島国際ワークショップ・プロシーディングス』（いずれも東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所刊）で公表・出版済である。



図 1 バリ国際ワークショップ



図 2 シンポジウムポスター

研究成果は床呂郁哉（編）(2019)『トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築（第 3 回）シンポジウム報告書』及び、床呂郁哉・吉田ゆか子・吉田優貴（編）(2019)『トランスカルチャー状況下における顔・身体（平成 30 年 3 月バリ島国際ワークショップ・プロシーディングス』（いずれも東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所刊）で公表・出版済である。

##### A01-P02「顔と身体表現の多文化比較フィールド実験研究」（代表：高橋 康介）

(1) 単純顔の表情描画実験・・・絵文字表情判断課題において◎のような単純化された顔の表情がタンザニア・カメルーンにおいては設計者の意図通りに読み取られないことを報告した（論文 5）。各地で単純中立顔◎から「笑顔」を描画する課題を実施した（図 1）。その結果、顔の単純化表現の多様性が示された。タンザニア・カメルーンにおける眉鼻ラインの出現割合は 20%超（他地域では 0%）、一方フィンランドでは輪郭すら脱落した抽象化が現れた。(2) 人物模写描画実験・・・顔写真を模写する課題を各地で実施した（図 2）。単純顔描画と同様にアフリカ地域において眉鼻ラインの出現頻度が高く（40%超、日本では 0%）、耳や歯の詳細が描かれている。現在、公募班（林班）と連携して当該地域顔写真の画像解析と描画画像の比較による顔認識の枠組みの検討を進めている。(3) 単純顔の表情判断実験・・・(1) で収集した絵を実験刺激として各地で表情判断実験を実施した結果、タンザニアやカメルーンで収集した笑顔については、日本よりも当該地域の人々の方が「笑顔」と判断する割合が高かった。(4) フィールド実験における語りの人類学的研究・・・フィールド実験中の対話から、図 1 のような絵がそもそも「顔」として認識されない事例が複数報告されている。以上のように、顔の抽象化や顔認識の枠組みの多様性について、フィールド実験を通してエビデンスが蓄積されている。



図 1: 左の顔を笑顔にする単純顔の表情描画実験。右が結果で、左からタンザニア・カメルーン・フィンランド・日本。タンザニア・カメルーンでは歯が細かく描かれ、鼻から眉にかけてのラインが描かれるのが特徴的である。一方、フィンランドでは輪郭まで脱落した抽象化が起きるケースがある。



図 2: 写真で提示された女性を模写する人物模写描画実験。左からタンザニア、カメルーン、ケニア、日本。単純顔と描画と同様、アフリカ地域では鼻から眉にかけてのラインが特徴的に描かれていることがわかる。

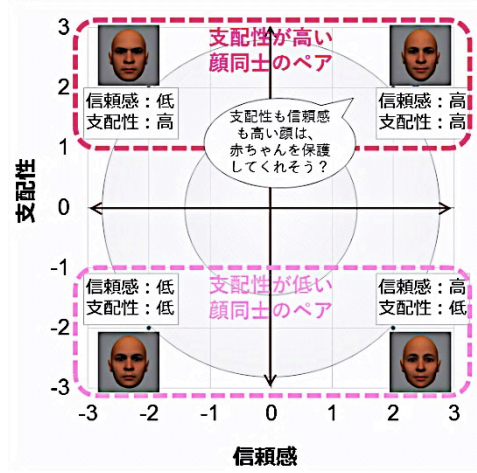
公募研究 A01-K105 顔・身体表現から検討するトランスカルチャー下の装飾美（山本 芳美）

国際シンポジウム「イレズミ・タトゥーと多文化共生—「温泉タトゥー問題」への取り組みを知る」を主催した（H31.3.30）。一般参加者 67 名、取材者 30 名以上が集まったこのシンポジウムでは、Matt Lodder 氏が「Japanese tattooing in the contexts of Japonisme in late 19th century Britain」、大貫菜穂氏が「イレズミのかたちと身体の形象との連環」を発表した。その後、タイ・マオリ・日本のストリートカルチャーから、フィールドリサーチに基づいたコメントがあり、芸術学や美術史、現代思想、文化人類学、ジャーナリストの視点から現状を検討した。

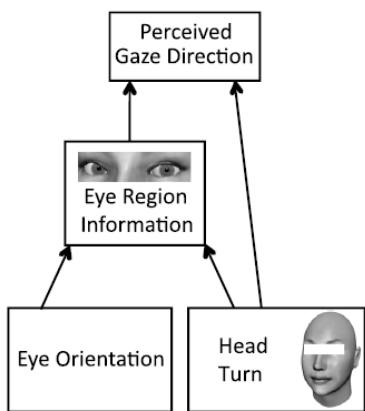
研究項目 B01 顔と身体表現の異文化を作り上げるメカニズムの解明

B01-P01「顔と身体表現の文化差の形成過程」（代表：山口 真美）

最も大きな成果は乳児の脳活動の縦断研究であり、顔処理について縦断的な脳計測のデータを示すことができたことである。生後 3 か月から 8 か月までの顔処理に関わる側頭部位の脳活動の縦断計測を、近赤外分光法（fNIRS）を用いて行い、正面顔認知と横顔認知で発達過程が異なり、その発達には個人差があること、生後 8 か月にに向けて個人差が小さくなることを明らかにし、日本経済新聞や国内外のネットニュースで成果が紹介された。個人差の発達とその起源を探る本領域にとって重要な研究である（論文 7）。日本人乳児の顔の印象形成の発達を検討する論文では、生後 6～8 か月の乳児がすでに成人と似た顔の印象評価を獲得していることについて発表し、毎日新聞で紹介された（論文 9）。イタリアのミラノビコッカ大との共同研究では、本申請の核となる「知覚的狭小化」、すなわち育てられた環境への適応過程の脳内機構を調べる実験成果を発表した（論文 12）。これ以外にも、乳児における母親顔をベースとした既知顔認知発達が生後 7 ヶ月にみられること（論文 11）、個人と表情のダイナミックな変化の知覚について明らかにした（論文 20）。これまでの研究期間で顔に関する一般書を公刊し（著書 8）、美美容や小児関連の研究団体や中国の小児科学会、保育の現場や盲学校での研修などで知見を広めた。



B01-P02「顔と身体表現における潜在的・顕在的過程」（代表：渡邊 克巳）



オーストラリア（ニューサウスウェールズ大）において顔と身体との相互作用に関するデータ取得を行い論文として公刊した。これは物理的な目の情報と頭部の位置情報から総体として視線方向が知覚されることを心理物理学的モデル化した最初の研究である。例えばスポーツや舞踊において身体と視線方向を意図的にずらして、それを観察する他者を欺くあるいは違和感を生じさせるといった行為・表現があるが、実場面での社会的コミュニケーションのなかで重要な位置を占める視線知覚について定量的に検討可能なモデルができたことは、トランスカルチャー状況下におけるコミュニケーションを考える上で重要な基礎をなすと考えている。また、顔認知を調べる際に最も基本となる顔認知・相貌失認質問紙の作成を行い、論文として公刊した。同一の顔であってもそれをどのように認知するかには大きな個人差があるため、顔認知の個人差を簡易に測定できれば、1つの課題に要する実験・測定時間の短縮によって、全

体としての実験時間を同一にしつつもより多くの課題を行わせることができ、人の多面性を評価できるようになる。さらにスイス・フリブール大との共同研究として顔データベースの構築を進めており、本データベースの構築状況そのものならびに、本データベースの一部を使用した動的な表情変化の認知について国際・国内会議にて発表した。

B01-P03「顔と身体表現における感覚間統合の文化間比較」（代表：田中 章浩）

850 名を対象とした感情知覚実験の結果、オランダ人では顔を優先させて読み取る「顔優位」であるのに対し、日本人では顔優位から児童期を通して徐々に声優位にシフトするとの発見が最大の成果である（図 1）。個人差に着目すると、母親が声優位であるほど子どもも声優位で感情を知覚する、つまり身近な大人の影響があることが明らかとなった。日本人では、外集団よりも内集団の話者に対して声優位で感情を捉える傾向が見られ、話者の見た目がコーカソイドであっても、日本語を話していれば声優位で感情を知覚することが明らかとなった。トランスカルチャー状況における「異質な他者」とは何かを考察するうえで重要な知見である（論文 30）。

感情の感覚間統合に関わる脳活動を fMRI によって安定して記録・解析可能な実験系を確立した。日本人成人データを解析した結果、感情の感覚間統合に関与する部位を同定し、顔と声一致しているか否かによる微細な脳反応の違いの同定にも成功し（図2）、トランスカルチャー状況下における重要な課題である成人移民における異文化再適応過程について実験を進める基盤が整備された。

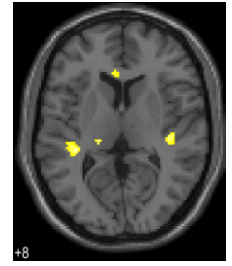
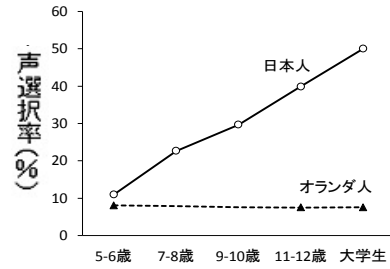


図2 顔と声の一致性に反応する脳部位

図1 視聴覚感情知覚の発達的变化

公募研究 B01-K115 深層学習による顔・身体画像表現の異文化差の解明 (林 隆介)

人間の脳の視覚情報処理は、これまで経験した視覚入力の画像統計量を反映した形で、自己組織的に獲得されると考えられ、地域間での視覚経験の違いによる脳内情報表現の違いは、顔や身体表現の地域差を生みだし、これらの地域差が文化差の根拠の一つとなっている可能性がある。林班では、教師信号を用いない機械学習や深層ニューラルネットワークの研究を進めている。計画班 A01-P02 との共同研究として、さまざまな地域で撮影された顔写真の解析を行い、アフリカ・ヨーロッパ・東アジア各地の顔描画課題との関連を調べた結果、顔写真に現れる顔の特徴的要素と、その地域の顔描写時に描かれる特徴的要素との対応関係が見出された。

研究項目 C01 顔と身体表現の比較現象学

C01-P01 「顔と身体表現の比較現象学」(河野 哲也)

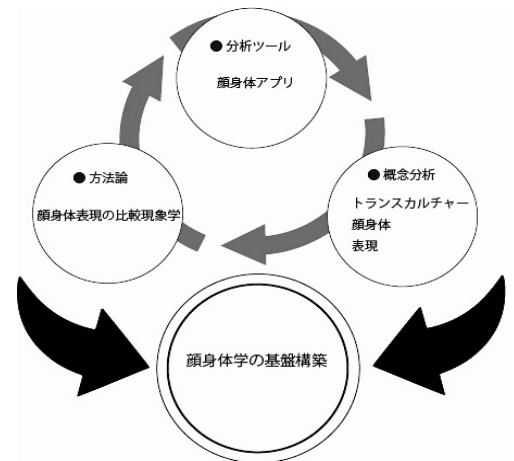
初年度は、顔を含む身体動作の分析を行うために、iPad 上で簡単に映像の編集ならびにコメントができる「顔身体アプリ」を製作すると同時に、インターネット上にウェブページ

(<https://www2.rikkyo.ac.jp/web/panta-rhei/index.html>) を構築し、本研究の趣旨、研究会の告知、相互の情報交換・研究交流を行うための基盤を構築した。

平成 30 年 8 月には、人種の現象学の専門家 Alia Al-Saji 准教授 (McGill University) と Helen Ngo 講師 (Deakin University) を招へいし、「顔身体学」がいかなる分野であるかを国際的にアピールするために、世界哲学大会 (北京) でシンポジウムを開催し、人種化された顔身体の知覚と文化・社会的制度との連関を分析した

(【国際会議】 Kono T, *Trans-cultural phenomenology of race*”, *TRANS-CULTURAL PHENOMENOLOGY OF RACE*, 24<sup>th</sup> World Congress of Philosophy, China National Convention Center, Aug. 14, 2018.(シンポジウム 13) Kotegawa S, “*Phenomenology of “Yellow Race”*”, *TRANS-CULTURAL PHENOMENOLOGY OF RACE*, 24<sup>th</sup> World Congress of Philosophy, China National Convention Center, Aug. 14, 2018 (シンポジウム 13))。

平成 31 年 3 月には、「トランスカルチャー」概念の領域内での共通理解を目指し、国際シンポジウムを開催した。Kono T, “*What is Transculture?*”, 国際シンポジウム「トランスカルチャーとは何か? 心理学と哲学の協働」、ワテラスコモンホール, H31.3.3 (シンポジウム 4)。



公募研究 C01-K102 身振り概念の変化のメカニズムに関する美術史的考察—古代ギリシア・ローマ美術から (田中 咲子)

古代ギリシア・ローマ美術において、しばしば多様な文脈の中で見受けられる「(両)手を上げる」身振りに着目し、その意味の変遷過程を明らかにするとともに、変化をもたらした要因を美術史・社会史的に説明することを目指している。身振りの図像表現を読み解く際には、生得的な身振りと社会的(後天的)なそれとを区別する必要がある。領域会議ではチンパンジーの専門家から種を超えた共通性について議論がなされるなど、身体をテーマとした人文科学と比較認知科学の融合が進んでいる。これを受けて、平成 31 年 3 月に班員 3 名が登壇する公開シンポジウムを早稲田大学で開催した(参加者は 25 名)。美術史と異分野との融合に、聴講者からは大きな関心が寄せられた。

## 5. 研究成果の公表の状況（主な論文等一覧、ホームページ、公開発表等）（5ページ以内）

本研究課題（公募研究を含む）により得られた研究成果の公表の状況（主な論文、書籍、ホームページ、主催シンポジウム等の状況）について具体的に記述してください。記述に当たっては、本研究課題により得られたものに厳に限定することとします。

- 論文の場合、新しいものから順に発表年次をさかのぼり、研究項目ごとに計画研究・公募研究の順に記載し、研究代表者には二重下線、研究分担者には一重下線、連携研究者には点線の下線を付し、corresponding author には左に\*印を付してください。
- 別添の「(2) 発表論文」の融合研究論文として整理した論文については、冒頭に◎を付してください。
- 補助条件に定められたとおり、本研究課題に係り交付を受けて行った研究の成果であることを表示したもの（論文等の場合は謝辞に課題番号を含め記載したもの）について記載したもののについては、冒頭に▲を付してください（前項と重複する場合は、「◎▲・・・」と記載してください。）。
- 一般向けのアウトリーチ活動を行った場合はその内容についても記述してください。

### 論文

A01-P01（計画・床呂）計 14 件（査読有 11 件、査読無 3 件）

- ▲床呂郁哉・河合香吏 (2019) 「新たな「もの」の人類学のための序章—脱人間中心主義のための可能性と課題」床呂郁哉・河合香吏編『もの人類学2』京都大学学術出版会 1-25（査読有）
- Tokoro I, Kawai K. (2018) **Why the Anthropology of Mono (Things)?** In Tokoro I, Kawai K. (eds.) *An Anthropology of Things*, Kyoto & Balwyn North Victoria: Kyoto University Press & Trans Pacific Press: 18-34.
- Yoshida Y. (2018) **Masks as Performers: Topeng, a Balinese Masked Dance Drama** In Tokoro I, Kawai K. (eds.) *An Anthropology of Things*, Kyoto & Balwyn North Victoria: Kyoto University Press & Trans Pacific Press: 155-170.
- Nishii R. (2018) **Muslim Face-veiling in the Da'wa Movement-Mae Sot as Living Space.** In Tokoro I, Tomizawa H. (eds.) *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia (Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand and Cambodia.* Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies (TUFS).

A01-P02（計画・高橋）計 1 件（査読有 1 件、査読無 0 件）

- ▲\*Takahashi K, Oishi T, Shimada M. (2017) **Is ◎ Smiling? Cross-cultural Study on Recognition of Emoticon's Emotion.** *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 48 (10), 1578-1586.（査読有）

B01-P01（計画・山口）計 22 件（査読有 21 件、査読無 1 件）

- ▲\*Tsurumi S, Kanazawa S, Yamaguchi MK, Kawahara J. (2019) **Rapid identification of the face in infants.** *Journal of Experimental Child Psychology.* (in press)（査読有）
- ▲\*Ichikawa H, Nakato E, Igarashi Y, Okada M, Kanazawa S, Yamaguchi MK, Kakigi R. (2019) **A longitudinal study of infant view-invariant face processing during the first 3-8 months of life.** *Neuroimage* 186, 817-824.（査読有）
- Kitayama S, Varnu, MEW, Salvador CM (2019) **Cultural neuroscience.** In D. Cohen & S. Kitayama (Eds.) *The Handbook of Cultural Psychology*, 2nd Edition. Guilford.（査読有）
- ▲\*Sakuta Y, Kanazawa S, Yamaguchi MK. (2018) **Infants prefer a trustworthy person: An early sign of social cognition in infants.** *PLoS ONE* 13(9), e0203541.（査読有）
- ▲\*Ujiie Y, Yamashita W, Fujisaki W, Kanazawa S, Yamaguchi MK. (2018) **Crossmodal association of auditory and visual material properties in infants.** *Scientific Reports*, 8, 9301.（査読有）
- \*Nakato E, Kanazawa S, Yamaguchi MK. (2018) **Holistic processing in mother's face perception for infants.** *Infant Behavior and Development* 50, 257-263.（査読有）
- \*Kobayashi M, Macchi Cassia V, Kanazawa S, Yamaguchi MK, Kakigi R. (2018) **Perceptual narrowing towards adult faces is a cross-cultural phenomenon in infancy: A behavioral and near-infrared spectroscopy study with Japanese infants.** *Developmental Science*, 21(1), e12498.（査読有）
- Miyamoto Y, Yoo J, Levine CS, Park J, Boylan JM, Sims T, et al. (2018) **Culture and social hierarchy: Self- and other-oriented correlates of socioeconomic status across cultures.** *Journal of Personality and Social Psychology* 115(3): 427-445.（査読有）
- Chopik WJ, Kitayama S. (2018) **Personality change across the life span: Insights from a cross-cultural, longitudinal study.** *Journal of Personality* 86(3): 508-521.（査読有）
- San Martin A, Sinaceur M, Madi A, Tompson S, Maddux WW, Kitayama S. (2018) **Self-assertive interdependence in Arab culture.** *Nature Human Behaviour* 2: 830-837.（査読有）
- Yu Q, Abe N, King A, Yoon C, Liberzon I, Kitayama S. (2018) **Cultural variation in the gray matter volume of the prefrontal cortex is moderated by the dopamine D4 receptor gene (DRD4).** *Cerebral Cortex* 11(6): 805.（査読有）
- Murakami T, Abe M, Wiratman W, Fujiwara J, Okamoto M, Mizuochi-Endo T, Iwabuchi T, Makuuchi M, Yamashita A, Tiksnadi A, Chang FY, Kubo H, Matsuda N, Kobayashi S, Eifuku S, Ugawa Y. (2018) **The Motor Network Reduces Multisensory Illusory Perception.** *The Journal of Neuroscience* 38(45): 9679-9688.（査読有）

18. Fujiwara J, Usui N, Eifuku S, Iijima T, Taira M, Tsutsui K, Tobler PN. (2018) **Ventrolateral Prefrontal Cortex Updates Chosen Value According to Choice Set Size.** *Journal of Cognitive Neuroscience.* 30(3): 307-318. (査読有)
19. Kato S, Fukabori R, Nishizawa K, Okada K, Yoshioka N, Sugawara M, Maejima Y, Shimomura K, Okamoto M, Eifuku S, Kobayashi K. (2018) **Action Selection and Flexible Switching Controlled by the Intralaminar Thalamic Neurons.** *Cell Reports* 22: 2370-2382. (査読有)
20. \*Ichikawa H, Kanazawa S, Yamaguchi MK. (2017) **Infants recognize the identity in a dynamic facial animation that simultaneously changes its identity and expression.** *Visual Cognition*, 22, 156-165. (査読有)
21. 山口 真美 (2017) 顔認知の個人差と文化差 *VISION* 29(1): 6-11 (査読無)
22. Kitayama S, Yanagisawa K, Ito A, Ueda R, Uchida Y, Abe N. (2017) **Reduced orbitofrontal cortical volume is associated with interdependent self-construal.** *Proc. Nat. Acad. of Sci.* 114(30): 7969-7974. (査読有)

**B01-P02 (計画・渡邊)** 計 7 件 (査読有 6 件、査読無 1 件)

23. ▲Nakamura K, Watanabe K. (2019) **Data-driven mathematical model of East-Asian facial attractiveness: The relative contributions of shape and reflectance to attractiveness judgements.** *Royal Soc. Open Science.* (in press) (査読有)
24. Abe MO, Koike T, Okazaki S, Sugawara SK, Takahashi K, Watanabe K, Sadato N. (2019). **Neural correlates of online cooperation during joint force production.** *NeuroImage*, 191: 150-161. (査読有)
25. Nguyen ATT, Palmer CJ, Otsuka Y, \*Clifford CWG. (2018) **Biases in perceiving gaze vergence.** *Journal of Experimental Psychology: General* 147(8): 1125-1133 (査読有)
26. ▲\*Otsuka Y, Clifford CWG. (2018) **Influence of head orientation on perceived gaze direction and eye-region information.** *Journal of Vision* 18(12): 1-22 (査読有)
27. ▲Matsuyoshi D, Watanabe K. (2018) **Intrinsic equivalence between developmental prosopagnosia questionnaires.** *bioRxiv*, 267351. (査読無)
28. Ueda H, Yamamoto K, Watanabe K. (2018) **Contribution of global and local biological motion information to speed perception and discrimination.** *Journal of Vision*, 18 (3) 2 (査読有)
29. Takao S, Murata A, Watanabe K. (2017) **Gaze-cueing with crossed eyes: Asymmetry between nasal and temporal shifts.** *Perception.* 42(7): 150-170. (査読有)

**B01-P03 (計画・田中)** 計 9 件 (査読有 5 件、査読無 4 件)

30. ▲Kawahara M, Yamamoto HW, Tanaka A. (2019) **Language or appearance? The trigger of the in-group effect in multisensory emotion perception.** *Acoustical Science and Technology* (in press) (査読有)
31. Yamamoto HW, Haryu E. (2018) **The role of pitch pattern in Japanese 24-month-olds' word recognition.** *Journal of Memory and Language* 99, 90-98 (査読有)
32. \*田中章浩 (2018) 感覚器とコミュニケーション *日本薬学会会報「ファルマシア」2018.11 月号*: 1040-1044 (依頼論文)
33. \*田中章浩 (2018) クロスモーダルな情動知覚 *映像情報メディア学会誌* 72(1): 10-14 (依頼論文)

**B01-P01 (計画・河野)** 計 4 件 (査読有 0 件、査読無 4 件)

34. \*小手川正二郎 (2018) 「難民の倫理学—見ず知らずの難民に責任を負うべきなのか」 『情報文化論』 13: 26-41 (査読無)
35. \*小手川正二郎 (2018) 「「男らしさ」(masculinities)の現象学試論——「男らしさ」の現象学はフェミニズムに寄与しうるのか？」 『國學院雑誌』 119(12): 1-14 (査読無)
36. \*河野哲也 (2017) 「排除なき世界への倫理」 『思想』 1118: 55-57 (査読無)
37. \*小手川正二郎 (2017) 「子をもつことと親になること—「家族」についての現象学倫理学の試み」 『倫理学論究』 4(2): 23-33 (査読無)

**公募班** 計 29 件 (査読有 18 件、査読無 11 件)

38. ▲Matsuda S, Omori T, McCleery JP, Yamamoto J. (2019) **Comparing Reinforcement Values of Facial Expressions: An Eye-Tracking Study.** *Psychological Record* (in press) (査読有)
39. ▲Hashiya K, Meng X, Uto Y, Tajiri K. (2019) **Overt congruent facial reaction to dynamic emotional expressions in 9-10-month-old infants.** *Infant Behavior and Development* 54: 48-56. (査読有)
40. 松田壯一郎・山本淳一(2019) 自閉スペクトラム症における他者感情認知障害へ対する行動的観点 *哲学* 143-162. (査読無)
41. Suzuki Y, Minami T, Nakauchi S. (2018) **Association between pupil dilation and implicit processing prior to object recognition via insight.** *Scientific Reports* 8: 6874. (査読有)
42. Wilson DA, Tomonaga M. (2018) **Visual discrimination of primate species based on faces in chimpanzees.** *Primates* 59(3): 243-251. (査読有)
43. Gao J, Tomonaga M. (2018) **The body inversion effect in chimpanzees (Pan troglodytes).** *PLoS ONE*, 13(10): e0204131 (査読有)



44. ▲Minami T., Nakajima K, Nakauchi S. (2018) **Effects of Face and Background Color on Facial Expression Perception.** *Front Psychol.* 9: 1012. (査読有)
45. Wilson DA, Tomonaga M. (2018) **Exploring attentional bias towards threatening faces in chimpanzees using the dot probe task.** *PLoS One* 13(11): e0207378. (査読有)

#### 著書

1. ▲床呂郁哉・河合香吏編 (2019)『もの人類学2』京都大学学術出版会
2. ▲床呂郁哉 (編) (2019)トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築 (第3回) シンポジウム報告書、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
3. ▲床呂郁哉・吉田ゆか子・吉田優貴 (編) (2019) トランスカルチャー状況下における顔・身体 (2018年3月国際ワークショップ・プロシーディングス)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
4. Tokoro I., Kawai K. (eds.) (2018) **An Anthropology of Things**, Kyoto & Balwyn North Victoria: Kyoto University Press & Trans Pacific Press.
5. ▲床呂郁哉 (編) (2018)トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築 (第2回) シンポジウム報告書、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
6. 吉田優貴 (2018) いつも躍っている子供たち—豊・身体・ケニア、風響社
7. Cohen D, Kitayama S. (2019) Handbook of cultural psychology, the 2<sup>nd</sup> edition. New York: Guilford Press.
8. 山口真美 (2018.10) 損する顔 得する顔 朝日新聞出版
9. 山口真美 (2018.7) 自分の顔が好きですか 韓国語版 돌베개
10. 山口真美 (2018.6) 自分の顔が好きですか 中国語版 机械工业出版社
11. 山口真美 (2017.11) 自分の顔が好きですか 台湾語版 大是文化
12. Otsuka Y. (2017) **Chapter 11 Development of recognition memory for faces during infancy.** In Tsukiura T. & Umeda S. (eds.) *Memory in Social Context: Brain, Mind and Society*, Springer pp.207-225 (分担執筆)
13. 山本寿子, 田中章造 (2019.3) 「感情」 麦谷綾子 (編著) 音響サイエンスシリーズ 21 『こどもの音声』、コロナ社
14. 田中章造 (2018.7) 視聴覚音声刺激を用いた実験 日本基礎心理学会(監修)『基礎心理学実験法ハンドブック』、朝倉書店
15. 田中章造 (2017.10) トピック 21 目は口ほどにものをいう?感情認知の文化差 宮崎真・阿部匡樹・山田祐樹(編)「日常と非日常からみるこころと脳の科学」 コロナ社
16. Kono T. (2018) **The garden as a representation of nature: a space to overcome biocultural homogenization.** In: Rozzi R, May RH Jr, Chapin FS III, Massardo F, Gavin M, Klaver I, Pauchard A, Nuñez MA, Simberloff D. (eds) *From biocultural homogenization to biocultural conservation. Ecology and ethics.* vol 3. Springer, Cham, 459-474.
17. 河野哲也 (2019.3) 『対話ではじめる子どもの哲学 - 道徳ってなに?全四巻』①自分のぎもん 童心社
18. 河野哲也 (2019.3) 『対話ではじめる子どもの哲学 - 道徳ってなに?全四巻』②家族・友だちのぎもん 童心社
19. 河野哲也 (2019.3) 『対話ではじめる子どもの哲学 - 道徳ってなに?全四巻』③社会のぎもん 童心社
20. 河野哲也 (2019.3) 『対話ではじめる子どもの哲学 - 道徳ってなに?全四巻』④命・自然のぎもん 童心社

#### 招待講演

1. Yoshida Y. **Disabled Bodies and Humor: Two cases of Balinese comedy theater.** UMS-TUFS Exchange Lecture on Culture and Society of Southeast Asia (Universiti Malaysia Sabah, 2019.3.13)
2. 高橋康介 顔・パレイドリア・文化 KG-RCSP 合同ゼミ(関西学院大学、2018.3.8)
3. 島田将喜・高橋康介・大石高典・錢琨 フィールドワーカーから見た心理学実験と実験心理学者から見たフィールドワーク KG-RCSP 合同ゼミ(関西学院大学、2018.3.8)
4. 高橋康介 顔認知における感性情報処理 第17回感性学研究会 (九州大学箱崎キャンパス、2018.1.18)
5. Shinobu Kitayama [Keynote address] Kellogg Culture and Negotiation Conference. (Northwestern University, 2018.4)
6. 山口真美 赤ちゃんの視覚と脳の発達 第26回自然科学研究機構シンポジウム「超越への挑戦」(国際交流会議場、2018.12.8)
7. 山口真美 赤ちゃんの発達 第41回日本美容外科学会総会 (品川、2018.10.24)
8. 山口真美 個性と身体表現の創発に関わる神経機構 第36回日本小児心身医学会学術集会 (広島県医師会館、2018.9.7)
9. 山口真美 **Infants' visual brain** 中国小児科学術大会 (蘇州、2017.10.20)

10. 山口真美 世界理解の新しい試み-質感の科学から- 認知科学会サマースクール (立命館大学、2017.8.31)
11. 山口真美 赤ちゃんの視覚と脳 東京都盲学校夏季専門研修会 (東京、2017.8.2)
12. 田中章造 円滑なコミュニケーションを進めるための感情認知と多様性 第22回労働PEN研究会(労務行政研究所、2019.3.29)
13. 田中章造 顔と声による情動の多感覚コミュニケーション 第81回メンタルコンシェルジュセミナー(慶應丸の内シティキャンパス、2019.1.22)
14. 田中章造 感情の多感覚コミュニケーション 教育認知心理学演習講演会(京都大学教育学部、2018.6.29)
15. Kono T. Research Project presentation and discussion: Construction of the Face Body studies in transcultural conditions, KAL Workshop: Body matters, The Many faces of Embodied Cognition (East China Normal University, 2018.8.23)
16. Kotegawa S. Phenomenology of Masculinities: Can the Phenomenology of Masculinities Contribute to Feminism? Nordic Society for Phenomenology (University of Gdańsk, 2018.4.20)

## シンポジウム

1. 国際シンポジウム「イレズミ・タトゥーと多文化共生 - 「温泉タトゥー問題」への取り組みを知る」(山本公募班主催、新宿、2019.3.30)
2. 哲学班シンポジウム「インゴルドと「あいだ」」(立教大学、2019.3.24)
3. ラウンドテーブル「「かわいい」の進化と文化」日本発達心理学会(早稲田大学、2019.3.19)
4. 国際シンポジウム「トランスカルチャーとは何か?心理学と哲学の協働」(東京、2019.3.2-3)
5. 第3回AA研公開シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」(東京外国語大学、2018.11.25)
6. 中央大学人文科学研究所共催シンポジウム(中央大学駿河台記念館、2018.11.22)
7. ショーン・ギャラガー招聘シンポジウム「匿名の視線と自己の成立」(中央大学駿河台記念館、2018.11.12)
8. 日本心理学会大会シンポジウム「顔魅力の心理学」(仙台、2018.9.25)
9. フォーラム顔学 2018 顔身体学シンポジウム(明治大学中野キャンパス、2018.9.1)
10. シンポジウム「差別と人種の現象学」(立教大学、2018.8.25)
11. 国際シンポジウム「人と人の中にあること:協調と競合の対人間ダイナミクス」(東大駒場、2018.8.22)
12. ムスリム女性のヴェールをめぐる学際研究(立教大学、2018.8.21)
13. シンポジウム“TRANS-CULTURAL PHENOMENOLOGY OF RACE” 24<sup>th</sup> World Congress of Philosophy (China National Convention Center, 2018.8.14)
14. 「ヴァーチャル世界でワタシはどうなる?」(日本科学未来館、2018.7.29)
15. 日本神経科学大会企画シンポジウム「個性と身体表現の創発に関わる神経機構」(神戸、2018.7.26)
16. 哲学班・人類学班合同公開WS「身体的経験をめぐる人類学と現象学からのアプローチ-不完全な身体、人種と身体、妊娠期の身体の事例から」(立教大学、2018.5.19)
17. 公開シンポジウムとB.アンドリュウ講演会「間とあいだの比較現象学」(立教大学、2018.3.13-14)
18. 日本視覚学会 2018年冬季大会大会企画シンポジウム「多文化をつなぐ顔と身体表現」(新宿、2018.1.18)
19. 第2回AA研公開シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」(東京外国語大学、2017.12.2)
20. キックオフシンポジウム(関東)(東京女子大学、2017.9.11)
21. キックオフシンポジウム(関西)(関西学院大学、2017.9.10)
22. 国際理論心理学会における顔身体学シンポジウム(立教大学、2017.8.24)

## 受賞

1. 高橋康介 (2018) The Young Psychonomic Scientist of the Year 2018
2. 河野哲也 (2018) アジア・テレビ賞 (Asian Television Awards) ファイナリスト
3. 山田祐樹 (2018) 日本心理学会国際賞奨励賞
4. 河原美彩子・山本寿子・田中章造 (2018) 日本心理学会第82回大会優秀発表賞
5. 氏家悠太 (2018) 平成30年度発達科学研究教育奨励賞
6. 中島悠介 (2018) 日本基礎心理学会第37回大会若手オーラルセッションファイナリスト
7. 高橋康介 (2018) 日本基礎心理学会第37回大会若手オーラルセッションファイナリスト
8. 佐々木恭志郎 (2018) 日本基礎心理学会第37回大会若手オーラルセッションファイナリスト

9. 楊 嘉樂 (2018) 日本基礎心理学会第 37 回大会若手オーラルセッションファイナリスト
10. 河原美彩子・山本寿子・田中章造 (2018) 第 8 回 Society for Tokyo Young Psychologists 優秀発表賞
11. Shinobu Kitayama (2017) Distinguished achievement award for advancing cultural psychology, Society for Personality and Social Psychology
12. 中村航洋 (2017) 日本基礎心理学会優秀発表賞
13. 小林 恵 (2017) 日本基礎心理学会優秀発表賞

#### 新聞報道・メディア・アウトリーチ等

1. 山口真美 TBS ラジオ「アフター 6 ジャンクション」に出演。アカデミックな「顔」についてのトーク (2019.2.5)
2. Mom, I can't recognize your face from profile view (EurekAlert! 2018.12.6)
3. 山口真美 横顔を見る力は、正面顔より後に速く発達～赤ちゃんの顔認知の発達を縦断的研究から明らかに～ (日本経済新聞、2018.12.5)
4. 山口真美 「なぜ、日本人はサングラスの人に警戒心を持つのか？」 (AERA.dot、2018.11.14)
5. 山口真美 「赤ちゃんも顔から印象が分かることが明らかに」～論文が学術雑誌「PLOS ONE」に掲載～ 実践女子大学 (Digital PR Platform) (デジタル毎日 2018.9.7)
6. 山口真美 インタビュー記事掲載 『おじさんを美少女化したテクノロジー 先端心理学が語る「VR の世界」』 (withnews(ウィズニュース) 2018.4.1)
7. 山口真美 NHK 総合「(^o^)/顔面白 TV」に出演 (NHK総合1 2017.7.18 PM10:25～11:15)
8. 山本芳美 大阪タトゥー裁判の記事にコメント掲載 (読売新聞朝刊 (大阪本社管内版) 2018.11.15)
9. 山本芳美 「入浴施設のタトゥーは是か非か「公平にすべき」「落ち着かず不愉快」W杯や五輪・・・外国人増で“タブー”に切り込む施設も」コメント掲載 (産経新聞 2018.10.27)
10. 山本芳美 朝日新聞デジタル記事 (リレーおびにおん)「維新 150 年：第 4 回 刺青認めぬ現代の息苦しさ」コメント掲載 (朝日新聞デジタル 2018.4.3)
11. 高橋康介 先端人「これ笑顔？世界で探る」(朝日新聞 2019.1.20)
12. 河野哲也・高橋康介・島田将喜 第 3 回顔身体カフェ「顔を描く・顔を描かれる・顔を知る」(代々木 2018.11.4)
13. 高橋康介 認知心理学者のタンザニア滞在記 (心理学ワールド 81、2018)
14. 島田将喜 「MWCS 活動報告 カトゥンピ小中学校で環境教育を行ってきました」(マハレ珍聞 32 号、2018)
15. 島田将喜 「第 10 回心理学者を実験室から連れ出しマハレへ」(マハレ珍聞 31 号、2018)
16. 高橋康介 「マハレ珍道中 第 9 回 帰路、一人旅、ムガンボ村にて船を待つ」(マハレ珍聞 30 号、2017 冬)
17. ▲田中章造 トークイベント「読みとれていますか？相手のほんとうの気持ち」(日本科学未来館、2019.4.14)
18. ▲田中章造 ワークショップ「わかるかな？人間の気持ちとロボットの気持ち」(日本科学未来館、2018.11.4)
19. 田中章造 トークイベント「Haptic Design Meetup vol.7 Haptic × (Kids) Design」(FabCafe MTRL、2018.9.7)
20. 田中章造 「ワークシーンで実践！印象アップの声の使い方講座」(ELLE ONLINE/CULTURE、2018.5.4)
21. 河野哲也・永井玲衣 「トークセッション「哲学対話」作品を見てみんなで話し合おう！」(『八色の森の美術展：ことの葉のかなたへ』実行委員会発行、110-113 頁、2019.3)
22. ▲河野哲也 (司会)、永井玲衣・古賀裕也・得居千照 (ファシリテータ) 第 2 回顔身体カフェ (金沢 21 世紀美術館、2018.1.20-21)
23. ▲河野哲也 (司会)、山口真美 (スピーカー)、永井玲衣 (ファシリテータ)、第 1 回顔身体カフェ (代官山クラブヒルサイドサロン、2017.12.23)
24. 河野哲也 (監修) NHK E テレ「Q～こどものための哲学」、第 16-20 回 (2019.3.25-29)
25. 河野哲也 (監修) NHK E テレ「Q～こどものための哲学」、第 11-15 回 (2018.8.6-10)
26. 河野哲也 (監修) NHK E テレ「Q～こどものための哲学」、第 6-10 回 (2017.12.25-29)

#### ホームページ等

「顔・身体学」領域ホームページ URL: <http://kao-shintai.jp/index.html>  
 哲学班ウェブページ URL: <https://www2.rikkyo.ac.jp/web/panta-rhei/index.html>

## 6. 研究組織（公募研究を含む）と各研究項目の連携状況（2ページ以内）

領域内の計画研究及び公募研究を含んだ研究組織と領域において設定している各研究項目との関係を記述し、研究組織間の連携状況について組織図や図表などを用いて具体的かつ明確に記述してください。

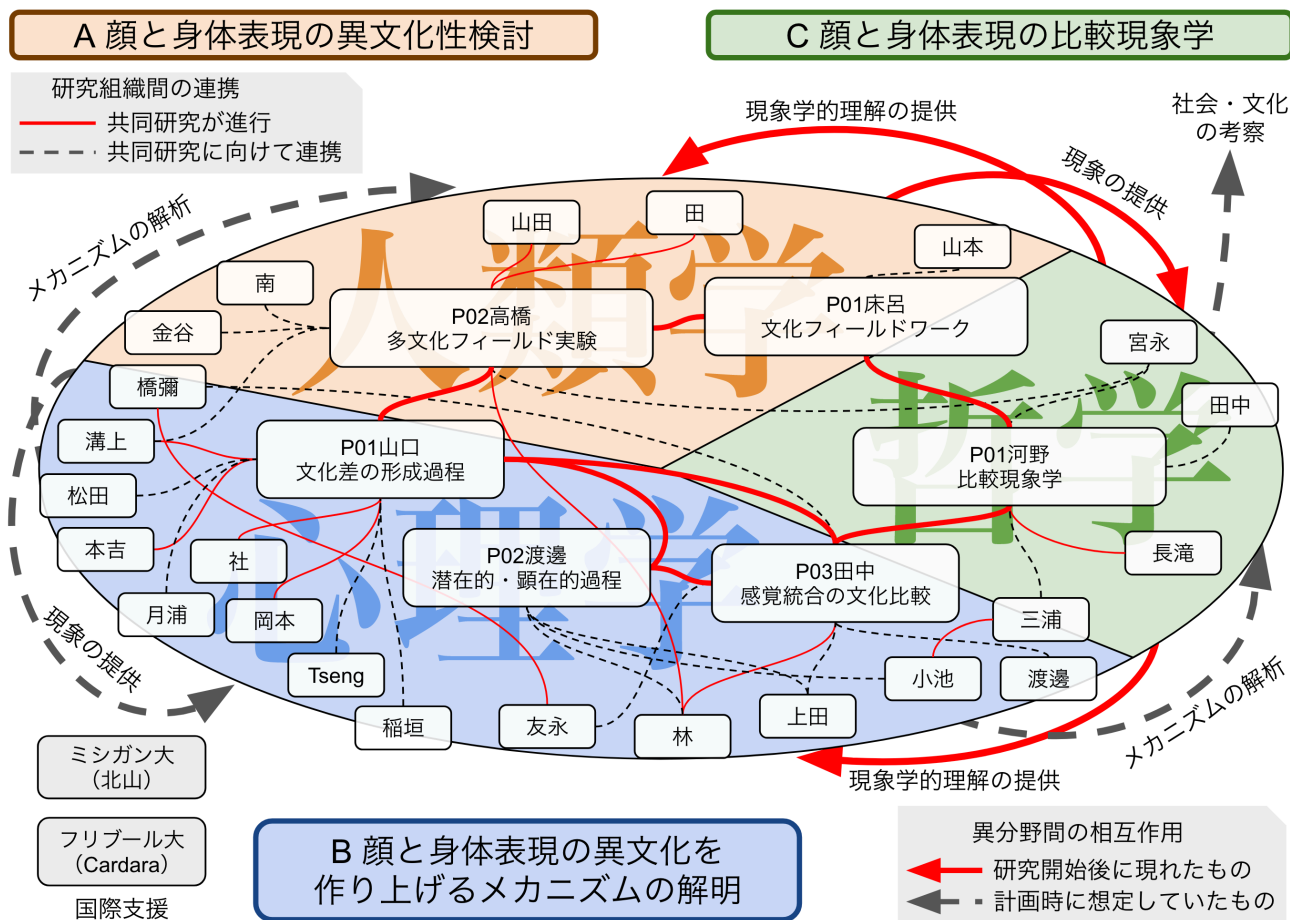


図1 研究組織図と各研究班の連携状況

**計画班・公募班の研究連携状況** 図1に研究組織と連携状況を示す。審査時の所見に従い、床呂班と高橋班は密な研究連携を進めている。床呂班主催のバリ島ワークショップに高橋班のフィールド実験を組み込んでデモ実験を実施すること、高橋班が開催する人類心理会議へ床呂班が参加しディスカッションを行うことなどを通して、研究アプローチの相互理解と手法の共有を図ってきた。現在までに、床呂班のフィールド（インドネシア）で高橋班のフィールド実験を実施する状況まで到達している。

人類学分野では上記連携に加え、人類心理会議（これまでに6度開催）において複数の公募班（床呂＝高橋＝公募山田＝公募田）も参加し、顔身体の人類的・心理学的解釈や研究手法の短所長所についての議論を深め、複数の研究班が連携してフィールド実験の多地域展開を進めている。

心理学分野では研究組織間での特定のテーマに沿った共同研究が複数進行中である。顔と声（視覚と聴覚）の統合に関するfMRI研究（山口＝田中）では玉川大学と連携してfMRI実験を実施している。環境による顔身体認知の変容に関する心理物理学研究（ネバダ大学 Michael A Webster 教授・山口＝渡邊＝公募溝上）として、複数研究班でネバダ大学を訪問し Webster 研究室のメンバーも交えてディスカッションを行い、国際共同研究がスタートしている。日蘭表情画像の深層学習（田中＝公募林）では、工学研究との連携も進められている。心理学および関連領域の中で異なる研究手法の融合も進んでおり、臨床医学と実験心理学での研究手法の共有（山口＝公募社）、fMRIを用いた異文化比較研究（山口＝岡本）などは本領域の中で新たに生まれた研究連携である。公募班同士の連携として、2者間インタラクションに関する共同研究（公募三浦＝公募小池）、乳児顔に対する大型類人猿の視線計測研究（公募橋彌＝公募友永）などが進行中である。個別の共同研究に加えて、心理学班全体での実験刺激・実験手法の共有化も行っている。渡邊班ではスイス・フリブール大学と共同で国際共同顔・表情データベースを構築し、領域内での共有を進めている。心理学班合同勉強会としてフリブール大学 Valentina Ticcinelli 博士を招き、眼球運動データ解析ツール iMap の講習会を行い、領域関係者15名が参加した。

哲学班では現象学的身体論に関する共同研究として、身体運動とスポーツ・武道・舞踏に関する以下に述べるアプリケーションを使った分析と同じく教育方法に関する検討を進めている（河野＝公募長滝）。

異分野間の共同研究として、機械学習を用いた顔特徴抽出とフィールドにおける顔描画の融合研究（高橋＝公募林）などがスタートしている。海外拠点を含む異分野連携として、グルノーブル大学 Olivier Pascalis 教授、フリブール大学 Roberto Caldara 教授、ネバダ大学 Michael A. Webster 教授（いずれも山口＝渡邊＝高橋）、トロント大

学 Kang Lee 教授（山口＝高橋）のもとで研究会を開催し、顔身体に関する実験心理学・フィールド実験・人類学の連携について議論を深めている。

哲学班を含む異分野連携として、顔身体アプリを製作した。顔を含む身体動作の分析を行う iPad 上で簡単に映像の編集とコメントができるアプリで、ウェブページも構築し、領域で共有している。さらに、哲学と他分野の連携をひとつの目的とし、河野班主催で顔身体カフェと冠した哲学カフェ（一般の参加者を募って特定のテーマに関して哲学的対話を行う場）を開催している。これまでに心理学（河野＝山口）、人類学・心理学（河野＝高橋＝公募田）と共同で顔身体カフェを実施した。心理学・人類学の研究者が哲学対話の場に直接参加することで、アウトリーチの一環という意義を超え、心理学・人類学の研究アプローチに対して哲学的考察を深める場としても機能している。また、哲学班と心理班の連携として、心の哲学における世界的権威である Shaun Gallagher 教授（メンフィス大学）を招聘し、シンポジウムを開催した。哲学で提唱された「自己主体感」という概念を実験心理学で実証し（心理学班）、その成果を提唱者本人（Gallagher 教授）を含む哲学者と再び共有することで新たな概念的発展へとつなげるという形で、心理学と哲学の循環的発展を進めることができた。

**異分野連携イベント** 研究連携に加え、本領域では研究アプローチが異なる人類学・心理学・哲学の相互理解を深めるために異分野連携イベント（シンポジウム・研究会・アウトリーチ活動）を積極的に実施しており、その数は約2年で20件以上にのぼる。表1に異分野連携イベントのリストを示す。床呂班主催のバリ島ワークショップ（H30年3月）には全計画班が参加し、バリ島でのフィールドワークに心理学・哲学が参加するという稀有な体験を実践した。毎年12月に開催しているAA研公開シンポジウムには、H30年度からは公募班メンバー（公募橋彌・宮永・山本）も発表者として参加し、連携を深めている。VR体験&トークイベント「ヴァーチャル世界でワタシはどうなる？」（H30年7月）では、ヴァーチャルユーチューバーの出現などヴァーチャル世界が現実味を帯びている中で、「私」という身体性の越境について心理学班と哲学班で議論を行った。顔に関する多彩な学問領域の研究者が集うフォーラム顔学2018では山口班と複数の公募班（公募渡邊＝公募松田＝公募田中＝公募社）を交えて「顔身体学シンポジウム—顔・身体研究の学際的アプローチ—」という特別セッションを開催し、好評を博した。各分野内でも計画班、公募班を含むイベントを多数行い、密な連携を推進している。心理学班合同ワークショップ（2018年11月）ではOlivier Pascalis教授、北山忍教授（ミシガン大学）を招聘して研究会を実施し、計画班及び公募班11班が参加した。以上のようなイベントがシナジー効果を生み出し、これまで接点の少なかった異分野の研究班の間で議論が行われ、共同研究が走り出すきっかけとなっている。

**顔身体学ハンドブック** 顔身体学は心理学、文化人類学、哲学、神経科学、認知科学、臨床心理学、教育学、社会学、政治学、美学、歴史学、デザインなど、およそ人間の顔と身体を対象とするあらゆる分野にかかわる学際融合的な研究領域である。顔身体学という研究領域の明確化を図るため、計画班メンバーを中心に、公募班からも8名の研究者（公募山田・月浦・上田・田・山本・宮永・長滝・三浦）が執筆に参加し、顔身体学ハンドブック（東京大学出版会、河野哲也・山口真美・金沢創・渡邊克巳・田中章浩・床呂郁哉・高橋康介（編）・全6章48節480頁・2021年3月刊行予定）の編纂を進めている。

表1：研究組織間連携イベントの一覧。参加班中、ゴシック体は公募班。

時期	A01 人類学	B01 心理学	C01 哲学	種別	タイトル・内容	参加班
2017/08				国際シンポジウム	第17回国際理論心理学学会シンポジウム	山口 高橋 渡邊 河野
2017/12				シンポジウム	トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築 第2回	全計画班
2017/12				アウトリーチ	第1回 顔身体学カフェ	山口 河野 田中
2018/01				シンポジウム	日本視覚学会「多文化をつなぐ顔と身体表現」	渡邊 床呂 高橋
2018/01				研究会	基礎心理学フォーラム	山口 渡邊
2018/02				研究会	第2回心理班若手公開研究会	山口 渡邊 田中
2018/03				国際研究会	バリ島ワークショップ	全計画班
2018/03				研究会	第3回心理班若手公開研究会	山口 田中
2018/05				シンポジウム	「身体的経験をめぐる人類学と現象学からのアプローチ」	床呂 河野
2018/06				研究会	文化人類学会文化会「文化人類学と異分野のコラボレーション」	高橋 床呂 山口
2018/07				シンポジウム	日本神経科学大会「個性と身体表現の創発に関わる神経機構」	山口 渡邊 田中
2018/07				アウトリーチ	科学未来館「ヴァーチャル世界でワタシはどうなる？」	山口 渡邊 田中
2018/08				研究会	電子情報通信学会HIP研究会「顔身体学」セッション	山口 渡邊 田中 松田
2018/08				シンポジウム	「ムスリム女性のヴェールをめぐる学際研究」	床呂 河野
2018/08				シンポジウム	「人と人の間にあること：協調と競合の対人間ダイナミクス」	小池 三浦
2018/09				シンポジウム	フォーラム顔学2018「顔・身体研究の学際的アプローチ」	山口 渡邊 松田 田中 社
2018/09				シンポジウム	日本心理学会「顔魅力の心理学」	山口 渡邊
2018/11				アウトリーチ	第3回顔身体カフェ「顔を描く・顔を描かれる・顔を知る」	河野 高橋 田
2018/11				国際シンポジウム	「匿名の視線と自己の成立」	山口 田中 河野 橋彌
2018/11				シンポジウム	心理班合同シンポジウム	山口 渡邊 田中 公募11班
2018/11				シンポジウム	トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築 第3回	計画班多数 橋彌 山本 宮永
2019/03				研究会	心理班若手勉強会（複数回）	山口 田中 稲垣 上田 社
2019/03				国際シンポジウム	「トランスカルチャーとは何か？心理学と哲学の協働」	計画班多数 山本 稲垣 宮永
2019/03				シンポジウム	発達心理学会「かわいいの進化と文化」	山口 床呂 橋彌 友永

## 7. 若手研究者の育成に係る取組状況（1ページ以内）

領域内の若手研究者の育成に係る取組状況について記述してください。

本領域においては、若手研究者の育成を、①若手研究者自身への研究サポートと連携の機会の創出、②領域内外の共同研究の推奨と促進、③海外共同研究の推奨と促進の3つの側面から推進している。

### ①若手研究者自身への研究サポートと連携の機会の創出

本研究領域においては、研究組織を構成する際に、若手研究者の積極的な採用（計画班への参加・公募班での採用）を行なった。さらに、採用した若手研究者のインセンティブの確保のために、若手研究者が自主的に行った複数の若手研究会の支援を継続的に行っている（電子情報通信学会 HIP 研究会、知覚研究会、心理班合同ワークショップでの英語による発表、顔身体カフェへの参加など）。また、全体領域会議においては、若手研究者向けポスターアワードを実施し、ポスター発表 48 枚中 37 枚は若手研究者（公募班の若手研究者も含む）によるものとなり、そのうちアワード対象者のポスター発表は 14 枚であった。さらに、本領域の中心概念となるトランスカルチャーを議論するために行われた国際シンポジウム「トランスカルチャーとは何か？」（H31 年 3 月 2 日・3 日）では、講演者 10 名中 8 名は若手研究者という、国際シンポジウムとしては異例のものとなった。これは、本領域における若手へのサポートを反映しており、本研究領域の原動力が若手研究者になりつつあることを示す一例と言えるだろう。

### ②領域内外の共同研究の推奨と推進

若手研究者の育成には、研究者本人の研究の推進や研究内容の深化、研究ネットワークの拡張に向けた共同研究の経験と、それによる研究業績の蓄積が必要であるという認識から、上記の若手研究会や領域会議の場を活用して、共同研究を開始あるいは展開することを推奨している。その結果、現在 19 件の国内共同研究が行われており（領域内：12、領域外：7）、若手研究者の業績の多くはこれらの共同研究によるものである。この数字は、39 歳以下の若手研究者が中心となって行っているものだけである点も強調したい。また、本領域の集大成の一つとして、教科書としても使える「顔身体ハンドブック」の出版を予定しているが、その執筆者としても多くの若手研究者に依頼しており（44 名中 16 名）、新しい視点を取り入れた形のハンドブックになるとともに、若手研究者自身と研究分野の認知、さらなる共同研究の推進につながると期待される。このような、領域内の共同研究の開始のきっかけとしては、領域会議や若手研究者同士のワークショップが重要な役割を果たしており、今後も継続的な交流を通して、若手研究者の育成の場として活用していく。

### ③海外共同研究の推奨と促進

本研究領域の研究内容は、本質的に国際共同研究を前提としている。この点に加え、本研究領域を国際的に認知された学問領域とするためにも、若手共同研究者が中心となって海外との共同研究を行うことを推奨し、それを可能にするような体制作りも行ってきた。具体的には、若手研究者を海外へ積極的に派遣し、海外共同研究の開始または促進を行った（領域発足時から海外研究連携機関への派遣：8 回、新しい海外研究機関への派遣：8 回：台湾大学、中国雲南省、カリフォルニア大学サンタバーバラ校、オハイオ州立大学など）。さらには、若手研究者自身による外国人研究者の招聘も 5 回行われている。その結果、現在の所、若手研究者主導による国際共同研究は 20 件にのぼっている。国際共同研究先としては、領域内で既に連携している連携機関をハブとした共同研究の拡張に加え、若手研究者が自分自身で開拓した連携先も 10 を超え（ラトガース大学、シカゴ大学、ヨーク大学、ウィーン大学、エセックス大学など）、順調な研究が行われており、今度の展開や拡張も期待できる。上記、国内共同研究と同様に、これらの海外共同研究もシニア研究者が行なっているものを除いたものである。

これらの若手研究者の育成の取り組みは、若手研究者の流動性とキャリアアップにも確実につながっており、1 名の若手研究者が教授に昇任した他、パーマネントの職として、2 名が准教授、2 名が助教となった。また、複数名が学術振興会特別研究員 PD に採用され、若手研究者自身の研究を行うキャリアパスを見出している。また、研究そのものの質の向上と研究内容の認知にもつながっており、5 名の若手研究者が複数の学会から賞を受賞している。

## 8. 研究費の使用状況（設備の有効活用、研究費の効果的使用を含む）（1ページ以内）

領域研究を行う上で設備等（研究領域内で共有する設備・装置の購入・開発・運用・実験資料・資材の提供など）の活用状況や研究費の効果的使用について総括班研究課題の活動状況と併せて記述してください。

領域各班の研究とその連携を支える事務作業のとりまとめを行うために、東京女子大学および中央大学に領域事務局を設置している。この領域事務局における業務の遂行にあたっては、総括班予算からリサーチアドミニストレーターおよび事務局事務補佐員の人件費、事務作業に用いる物品費を支出することで、領域の円滑な運営を行うための環境を整備している。

また、領域ウェブサイトを立ち上げ、Facebook、TwitterなどのSNSも併用しながら、領域の研究活動成果やイベント実施の情報、プレスリリースやメディア対応の履歴を知らせる広報発信体制を整えている。これらのウェブサービスの作成およびサーバー利用費、さらに世界に広く発信するために必要な英語ページの英文校閲費などは、総括班予算から支出され、領域の存在を全世界に伝えることに貢献している。これらの広報活動はウェブ上だけでなく、同時に書面の配布や掲示によっても行っている。イベントポスターや年に一度のニューズレターを作成し、これらを各大学の専攻オフィスや研究室に配布することにより、これまで「顔・身体学」の名を知ることのなかった人々の目にも本領域の存在を知らせる効果をもたらしている。これらの作成・印刷費も、総括班予算から計上している。過去2年間を通し、総括班予算を適切に活用することによって、このような運営と広報の仕組みが確立され、事務局が中心となって領域としての高い求心力が実現されている。

さらに、領域会議を年に2回行い、公募班まで含めた研究の進捗状況を確認するとともに、新たな課題や共同研究の可能性について検討する機会を得る上で、領域メンバーの旅費が必要となる。第3回領域会議では、若手研究者の育成および領域への貢献を促すため、領域会議の参加に必要な旅費を支援するトラベルアワードの募集を実施した。この結果、優秀と認められた14件の発表に対して総括班予算から旅費の支援を行った。さらに、心理班を対象とした国際ワークショップを開催し、同日、世界の乳児の顔知覚研究をリードするオリヴィエ・パスカリス教授を招聘して講演会も行った。このほかにも、領域主催イベントでは哲学のショーン・ギャラガーをはじめ著名な研究者を多く招聘しており、これらにも総括班予算が使われている。

本領域の研究活動を遂行するには、世界中のフィールドワーク、大規模な実験の実施、膨大なデータの分析が欠かせないため、これらに多くの人員が必要となる。そこで領域の各計画班予算からは、博士研究員や研究補助員を雇用するための人件費を支出している。これらは多くの若手研究者が本領域にかかわるきっかけを生み出し、結果として彼らの研究職への就職や学会における受賞、多くの活躍を促すことで、若手研究者の育成にも大きく貢献している。

また、トランスカルチャーをテーマとする本領域の研究活動は、カバーする対象地域が世界中の多岐にわたる。そのため、比較文化的検討を可能とするフィールド実験や、毎年3-4週間程度の滞在を要する長期的な調査を各地で行うための旅費が必要となる。そして、本領域の研究遂行にあたっては、多数の研究協力者を要する実験や調査が必要となるため、各計画班予算から謝金の支払いを行うことによって、研究を効率的に進めている。

各班の研究の遂行に必要な機材として、脳機能の測定および検討を可能にするEEG、TMS、眼球運動の計測を行うアイトラッカーを購入している。たとえば、渡邊班が購入したEEGが山口班の研究に使用されているといったように、これらの高額機材は各計画研究の遂行において使用されるのみならず、領域内において、より多くの研究者が共同で使えるように努めている。さらに、各班で同じ機材が必要になった場合に、できるだけ機種を揃えるということも、今後の共同研究を可能にする工夫として実践されている。また、機材のほかにも、各計画班の研究遂行において作成した顔データベースや実験バッテリーを、他の計画班・公募班が自由に使えるように提供し、経費内で最大限の成果が得られるように努めている。このような機材やデータベースの共同利用を促す試みとして、スイス・フリブル大学カルダララボのヴァレンティナ・ティッチネリ博士を招聘し、世界最先端の眼球運動解析技術を習得するための講習会を行った。なお、この招聘は総括班予算によって行っているが、同時に国際共同研究の打ち合わせも兼ねることで旅費の節約にも努めており、機材の節約にも繋がるというように、各費目が相乗効果を生み出す効果的な使われ方となっている。また、従来の研究とは異なるアプローチ方法として、タブレットやスマートフォン上で簡単に映像の編集ならびにコメントができ、顔を含む身体動作の分析を可能とする「顔身体アプリ」の製作を行った。このアプリケーションはインターネット上のウェブページ (<https://www2.rikkyo.ac.jp/web/panta-rhei/index.html>) を介して、領域メンバー内で共有されている。

以上のように、研究費は適切な用途に使われており、さらに可能な限り領域内での共有を心掛けることで、効率よく使えるように努めている。

## 9. 総括班評価者による評価（2ページ以内）

総括班評価者による評価体制や研究領域に対する評価コメントを記述してください。

### 富沢 寿勇（静岡県立大学・教授）

総括・計画研究計7班は総じて順調で興味深い進展を示している。プロジェクトの連携状況を見ると、A. 顔と身体表現の異文化性の検討（人類学）、B. 顔と身体表現の異文化を作り上げるメカニズムの解明（心理学）、C. 顔と身体表現の比較現象学（哲学）の領域間で分野を超える連携と協力が各種試みられており、研究開始後に現れた異分野間の相互作用も各種報告されている。A01-P01班では、人類学的フィールドワークの研究手法が駆使され、顔と身体表現について現場の脈絡に根差した実証研究と比較研究が活発に展開され、他方、A01-P02班はフィールド実験でかなり異なる手法だが、心理学系の実験手法を実際に東南アジアのフィールドで実施するなど、両班の研究者が相互乗り入れする試みは注目に値する。また領域間を結ぶ人類学・心理学合同の会議やシンポジウム、顔身体カフェ等の活発なアウトリーチ活動を含む試みも評価したい。なお領域会議やシンポジウムでは、若手の研究者を含む参加者が、それぞれのディシプリンを背景とした報告や発表を実施しつつも、質疑応答の場などでは分野間の垣根を超えてディスカッションを展開するといった場面も多く見られた。今後も、トランスカルチャー状況下での顔や身体表現の研究をめぐる更なる議論の深化と、学際的な連携・協力の更なる活性化を含む研究の継続が大いに期待されるところである。

### 柿木 隆介（自然科学研究機構生理学研究所・名誉教授）

新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築—多文化をつなぐ顔と身体表現」は、非常に興味深いテーマを取り上げており、また新学術領域研究にふさわしいユニークかつ斬新なプロジェクトとして、高く評価する。領域代表者は、「異質なものが共存していく社会の中での顔と身体表現が持つ可能性、顔と身体を使いこなすことにより異文化理解を促す可能性を、心理学・文化人類学・哲学の視点から、既存の研究分野の枠組を超えてともに検討していきたい」と、「研究領域の目的及び概要」で強調しているが、それにふさわしい活動が行われている。評価者の専門領域は、脳科学、特に心理学と認知科学であるため、主としてB01班の活動について評価する。

中央大学の山口真美教授は、領域代表者として領域のマネージメントを行うかたわら、研究者としてもすぐれた業績を上げている。乳児を対象とした顔認知研究は国際的にも高い評価を受け、カナダ・アメリカ・フランス・イタリア・スイスの研究者との国際共同研究も積極的に進めている。今年度は、「生後3か月から8か月までの顔処理に関わる側頭部位の脳活動の縦断計測」、「顔から得られる第一印象の重要な2大因子である「信頼感」と「支配性」の獲得過程の解析」、「知覚的狭小化、すなわち育てられた環境への適応過程の脳内機構の解析」の3テーマについて、英文原著論文を発表した。いずれも優れた論文であり、メディアによって国内外に広く紹介された。

早稲田大学の渡邊克巳教授は、幅広い分野において高レベルの研究を行い、国内のみならず、国際的にも高い注目を集めている俊英である。本研究領域では、特に「国際共同顔・表情データベースの構築」、「主観印象を操作できる顔構造統計モデルの構築」、「顔認知能力の個人差の推定法」、「社会適応に関わる顔身体認知の社会・文化による影響」、の4テーマについて着実に研究を進めている。

東京女子大学の田中章浩教授は、コミュニケーション研究に関する第一人者である。「顔・身体学」領域には、コミュニケーションに関する研究が必須であり、本領域のキーパーソンの一人である。本研究領域では、顔・身体・声の認識様式の文化的多様性の根源として、感覚間統合に着目し、幼児期から成人にかけて感情知覚における複数情報統合の様式がどのように変化するかを比較文化的に検討することにより、これらの知見を統一的に説明する理論的枠組みの提唱を目指している。特に、「オランダ人では顔を優先させて読み取る「顔優位」であるのに対し、日本人では「顔優位」から児童期を通して徐々に「声優位」にシフトする」ことを明らかにした研究は非常に興味深いものであった。

公募研究者に関しては、本研究テーマにおける俊英を網羅しており、今後の新たな切り口からの研究の進展に大きな期待を寄せている。



## 村田 純一（東京大学・名誉教授）

現代では、情報技術の急速な進展にも促されて大小さまざまなレベルで異なった文化のあいだで交流が進むとともに、新たな差異化や衝突が生じている。本研究はこうした状況を「トランスカルチャー」的な状況と呼んだうえで、そこで生じている出来事を顔と身体という生身の人間同士の相互理解のあり方に焦点を絞って、文化人類学的手法を使うフィールドワークや心理学における実験研究など多様な研究を組み合わせる明らかにしようとしており、すでに多くの業績をあげている。文化人類学と心理学との共同研究に加え、他者理解や身体性についての研究蓄積を持つ哲学的視点が加わって、概念整理や、研究成果の社会的還元が試みられており、こうした点でも本研究は現代の課題に答えようとする大変意欲的で有意義な研究とみなしうる。

これまでの研究においては、研究者が全員参加する領域会議のみならず、個別のテーマを設定して行われた国内外でのワークショップやシンポジウムでも、ひとつの分野に限定せず、3分野の研究者が参加し連携する試みがなされており、研究組織として統一性を確保する工夫がなされている。また領域会議では、若手研究者に対して、ポスターセッションによる発表の場を与えるなどして若手支援にも力を入れている。これらの点で、総括班が有意義な役割を果たし成果をあげているといえるだろう。

他方で、さまざまな会議の機会に3分野の研究者同士での議論の場を設けるなどすると、より広い視野から研究の連携を強化することができるのではないかと思われる。

審査結果の所見のなかでは、トランスカルチャーという言葉や異文化といった言葉があいまいに使われている点が指摘されていた。本研究ではこの研究の中核にかかわる問題を十分意識して取り上げて、概念を明確化する努力がなされている。これまでのところ、トランスカルチャーという言葉によって、伝統的に使われてきた「異文化理解」や「間文化性」といった言葉が意味する範囲を超えて、より広く「境界設定と越境」という二面を持つ現象としてとらえ、たとえばトランスジェンダーと呼ばれる現象までも含むという提案がなされている。こうした仕方での概念の明確化が進められ、顔身体をめぐる具体的分析を導く方向性が得られつつあることは大いに評価できる。同時に、このような研究の進展によって「刷新された文化概念」にさらに具体的な内実が与えられることが期待される。

## 10. 今後の研究領域の推進方策（2ページ以内）

今後どのように領域研究を推進していく予定であるか、研究領域の推進方策について記述してください。また、領域研究を推進する上での問題点がある場合は、その問題点と今後の対応策についても記述してください。また、目標達成に向け、不足していると考えているスキルを有する研究者の公募研究での重点的な補充や国内外の研究者との連携による組織の強化についても記述してください。

今後も異なる学術分野間の交流を深め、トランスカルチャーについての見解、さらにトランスカルチャーの中での顔身体への役割についての議論を進めていく。以下の項目については特に重点を置いて推進していきたいと考える。

### 【顔・身体学を学問分野の一領域として国内に広める試み】

関東と関西で開催した2回のキックオフシンポジウムをはじめとして、これまで本領域を一般に広める試みを下記の通り多数行ってきた。関連学会において学術分野を超えた交流を示すため、さらに若手研究者を対象に本領域のプレゼンスを深めるためのシンポジウムを開催したことは大きな試みであり、今後も継続的に開催していく予定である。特に科学未来館の「サイエンスアゴラ」、「未来の先生展」などでサイエンスカフェ形式の「顔身体カフェ」を開催し、本領域を一般に広める試みを行いたい。オリンピックイヤーとなる2020年には武道とスポーツの関係について考えるシンポジウムを開く予定である。これらの集大成の一つとして「顔・身体学ハンドブック」（東京大学出版会）を2021年度中に出版することにより、多様な方法論で「顔・身体学」という一つのテーマの解明を目指す学問領域の確立を目指す。それぞれの大学で教育できるようなかたちで提供することを目指し、究極の目標としては学部教育の一つの分野になるような、あるいは人文社会科学における魅力ある学科・専攻の一つとなることを目指したい。

- ・H29.9.10 キックオフシンポジウム@フォーラム顔学2017（関西方面公募説明会を兼ねる）
- ・H29.9.11 キックオフシンポジウム@東京女子大学（関東方面公募説明会を兼ねる）
- ・公開シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」（第2回、第3回）
- ・顔身体カフェ（第1回@代官山、第2回@金沢、第3回@代々木、第4回@福島）
- ・H30.7.29 日本科学未来館トークイベント「ヴァーチャル世界でわたしはどうなる」
- ・関連学会年次大会での企画シンポジウムの開催（日本視覚学会、基礎心理学会、日本文化人類学会分科会、日本神経科学大会、日本顔学会、日本心理学会等）

### 【トランスカルチャーと顔・身体性に関する領域の成果を世界に発信する試み】

下記のようにこれまで本領域を世界に発信する試みをワークショップやシンポジウムとして行ってきた。この試みをさらに進めるため、*Philosophy of Cultural Embodiment* というタイトルの学術雑誌を来年度中に創刊する予定である。本領域のメンバーと本領域にかかわり本領域を世界的にリードする海外の研究者を含めて編集を行い、心理学と文化人類学・哲学を融合した新しい視点の学術領域を確立し、世界に発信していきたいと考える。

- ・H29.8.24 国際理論心理学会における顔身体シンポジウム
- ・H30.3.13-14 公開シンポジウムとB.アンドリュース講演会
- ・H30.11.12 ショーン・ギャラガー教授招聘シンポジウム「匿名の視線と自己の成立」
- ・H31.3.2-3 国際シンポジウム「トランスカルチャーとは何か？心理学と哲学の協働」

### 【障がい者・LGBT・マンマシシステムなどの多様性の研究をさらに追求すること】

下記のイベントやシンポジウムを行う中で、国や地域との越境だけではなく、様々なレベルでの越境とそこに作られる新たな壁という問題が表面化し、議論が続けてきた。この課題を、異なる学問分野の視点から互いに議論しあいながら、今後も追求することは重要な課題であると考えている。

すなわちトランスカルチャー研究を行う上で見えてきた新たな問題として、科学技術の進歩によりみえてきた新たな越境や境界の存在、また障害やLGBTの中での見えにくい境界とその中で新たに作られつつある境界の存在など、さまざまな境界が発見されつつあり、こうした文脈においても、個別事例の研究や調査研究から、実験室実験への展開へと、それぞれの分野の利点を生かして互いに連携しつつ模索を行っていききたいと考える。この点に関してさらなる強みを模索するため、公募研究あるいは各計画班の中に、当事者研究の受け入れを検討していきたいと考える。

- ・H30. 5. 19 「身体的経験をめぐる人類学と現象学からのアプローチ—不完全な身体、人種と身体、妊娠期の身体  
の事例から」
- ・H30. 8. 21 シンポジウム「ムスリム女性のヴェールをめぐる学際研究」
- ・H31. 3. 2-3 国際シンポジウム「トランスカルチャーとは何か？心理学と哲学の協働」

**【国際ワークショップの開催：多様な地域での国際ワークショップの展開と海外との共同研究の関係】**

下記のようにこれまでバリ、ジャカルタ（インドネシア）等アジア地域で国際ワークショップを重ねてきたが、新たにナイロビで国際ワークショップを行いたいと考える。こうして日本と比較する対象をさらに多様にする  
ことにより、様々な地域との違い、すなわち様々な越境をそれぞれの研究者が体現することができ、従来の限定さ  
れていた比較視点を広げることができると思う。特に実験室実験を行う心理学者にとって、現状ではカウンタ  
ーパートとの比較に限られた研究が多いため、このような体験はたいへん貴重であると思う。

- ・H30. 3. 1-5 バリ国際ワークショップ
- ・H30. 11. 22 心理学班合同国際ワークショップ（北山教授・パスカリス教授をお招きして 日本開催）
- ・H32. 3. 4（予定）ジャカルタ国際ワークショップ

**【公募研究の展開：身体研究の活性化を目指す】**

これまで遂行してきた計画研究や公募研究の研究課題が、どちらかという顔研究が多かったこともあり（現  
在の公募研究や計画研究では、身体を対象とする研究は7件に留まっている）、今後は身体研究の活性化を目指し  
たい。具体的には、現在身体研究を進めている研究者を対象に、積極的に公募班への参加を促す。また平成30年  
11月に実施したギャラガー教授の招聘を足がかりとして、共同研究の実施など独自の視点で世界に発信できる身  
体研究の活性化を目指したい。